金正日先軍政治

・先軍政治論

・先軍政治具現

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ91（2002）

金正日先軍政治

金　哲　佑

外国文出版社
チュチェ 91(2002)

本書は南朝鮮の政治学教授金哲佑の著書
『金正日指導者の先軍政治』の訳本である。

チュチェ 91（2002）年 4 月　編集部

はじめに

今日、北朝鮮（チョソン）でおこなわれている金正日（キムジョンイル）将軍の政治は、南朝鮮はもとより世界の耳目を引いている。

政治史上はじめて出現した金正日政治は、あるいは高く評され、あるいは驚愕と危惧をもって眺められており、そうしたなかでその正しい内容を知りたいと願う人びとの数は日を追って増加している。

そこで筆者は、金正日政治の正しい意味と内容を全面的に掘り下げて一冊の本にまとめあげてみたいと思った。もっとも、金正日将軍の政治方式についての研究がまだ浅いわたしにとってそれが可能だろうかというためらいがなくもなかったが、思い切って筆を取ることにした。

祖国の統一を実現するには、南の人々も北朝鮮を正しく理解する必要がある。そのためにはなによりも金正日将軍とその指導について正確な認識をいだくべきだというかねてからの思いにせかされ、この際、金正日政治について考察するのが一番の近道だとも考えて、本書の執筆に着手した次第である。

金正日政治の案内書にすぎない本書が、金正日将軍の偉人像を把握するうえに多少なりとも寄与できるならば、望外の喜びである。

著者

目　次

Ⅰ　先軍政治論

1　金正日政治方式の登場

先軍政治がチュチェの政治とされるのは、自主的な生活を願う人民大衆の志向が反映されたチュチエ思想を基礎とし、それをもって貫かれているからである。

先軍政治は社会主義と人民大衆の尊厳を守り、国力を最大限に強化している北朝鮮の現実から、その正しさが立証されている。

東欧の社会主義諸国を崩壊に導いた大きな原因の一つとして軍の思想的弱体化が挙げられているが、このことは、社会主義偉業の遂行で軍事問題がいかに重要な地位を占めているかをはっきりと示している。

社会主義は資本主義とのたたかいを通して生まれるものであり、また反動派の反革命的攻勢にさらされながら社会主義を建設しなければならないのであるから、軍事力の優先は避けられない。

マルクスとエンゲルスも社会主義制度をうち立てるためには革命的暴力を準備しなければならないとして、それがほかならぬ労働者、農民をはじめ勤労大衆からなる軍隊だと指摘しており、その後も労働者階級の革命理論は、プロレタリアートは帝国主義など反動勢力が敗退し滅亡するまで決して武器を置くべきでないとして、労働者階級の軍隊の必要性とその任務の重要性を強調してきた。

ところで、先軍政治方式は金日成（キムイルソン）主席の軍重視思想を金正日将軍が今日の状況に即して具現したものである。

先軍政治方式はポスト冷戦—デタント時代への移行とともに地球上におきた進歩派と反動派の間の勢力関係の変化にたいする分析にもとづいて金正日将軍がうちだした政治方式である。

先軍政治方式の出現は、社会主義朝鮮への帝国主義勢力の挑戦と切り離して考えることはできない。

1994 年 7 月以降、世界の耳目は北朝鮮、とりわけ金正日将軍に向けられてきた。

国運を開き、社会主義偉業を継承・完成するうえで、いつにもまして強力な政治的指導力が求められていたときに、社会主義朝鮮の創業者金日成主席が急逝し、国の命運は全的に金正日将軍に託されることになったからである。

社会主義政治史においても権力の継承過程は避けられないものであり、北朝鮮の場合も、すでに 30 数年前から党と国家、革命の全般を指導してきた金正日将軍が主席の跡を継いだのは当然なことであったが、かつてない試練の時期に国と民族の運命を開く重大な歴史的課題を単身で担当遂行しなければならなくなったのである。

世界は東欧社会主義の崩壊後、北朝鮮がアメリカを先頭とする帝国主義連合勢力と単独で対抗しなければならないいま、将軍がどう危機に対処していくだろうかと、注視した。南朝鮮やアメリカなど西側諸国では北朝鮮が難局の打開を路線・政策の変更に求めざるを得なくなるであろうと、公然と期待されていた。

冷戦の終結によって世界制覇戦略の野望をたくましくしたアメリカにとって、北朝鮮の動きはとくに関心の的にならざるを得なかった。

かれらは以前から朝鮮半島を世界制覇戦略の重要な橋頭堡と目していた。ここが日本と海を隔てて隣り合い、中国、ロシアのような大国とも国境を接していることから、アメリカは太平洋を渡って大陸に進出する恰好の踏み台であるとして、大戦後、半世紀を越えるいまも南朝鮮に居座っているのである。

しかし南朝鮮はあくまでも半島の南半分であり、大陸とはじかに接していないため、日本と同様一つの「島国」に過ぎなかった。

とりわけ 90 年代初めのソ連崩壊後ロシアと手を取り、中国とは 70 年代から修交関係にあるアメリカとしては、南朝鮮より北朝鮮に足をつけている方が戦略目標の達成にはるかに有利である。そこでかれらは 90 年代の有利な情勢に乗じて、社会主義の原則をいささかも曲げることなく赤旗をひるがえして進む北朝鮮を政治的に孤立させ、さらには経済封鎖と軍事的圧力を強化して内部崩壊を促そうと企てた。

西側世界で騒がれた北朝鮮の「政策変更」「路線変更」説は、苦境にあえぐ北朝鮮がいずれチュチェ社会主義の赤旗を降ろすであろうという判断のもとに流布されたものである。実際北朝鮮の事態は由々しいものがあった。

ところが、金正日将軍の対応はその予想を全面的に裏切るものであった。

「わたしに、いかなる変化も期待するな」「社会主義は守れば勝

利し、棄てれば死を招く」という政治的見解の表示は、いかに情勢が悪化してもチュチェの社会主義を決して放棄することなく、最後まで完成させてゆくであろうという鉄の信念と意志の表明であった。

それでは、金正日将軍がなにを頼みとし、誰に期待をかけて、今日だけでなく遠い未来においても社会主義をゆるぎなく守るであろうと、堂々と宣言しえたのであろうか。

それは将軍のもとに数十年間にわたって鍛え上げられた軍事力があるからである。

世界は、金日成主席の没後における最初の軍視察、つまり 1995 年正月 1 日早朝におこなわれた朝鮮人民軍部隊にたいする金正日将軍の現地指導を通して、その一端をうかがい知ることができた。この日の軍視察は、軍を信頼し、軍に依拠して苦難を乗り越え、未来を開いていこうとする将軍の政治的決意が歴々と見てとれる歴史的な歩みであった。

将軍が、銃をもってわれわれの社会主義を守り、チュチェの革命偉業を完成するのはわが党の不変の信念であり、意志である、と述べたのは、そうした政治的決意の表れである。

将軍はまた、自分は主席の急逝後、「万景台（マンギョンデ）の別れ道」についていろいろと考えた、日本帝国主義を打倒して祖国に凱旋した金日成主席は、祖父母が待ちこがれる郷里の万景台を目前にしながらもここを通りすぎて降仙（カンソン）製鋼所の労働者から先に会った、祖国の解放直後われわれには党も国家も正規の軍もなかったが、いまはそうでない、あのとき、新しい国づくりで唯一の頼みはひとり労働者階級であった、ところが現在のわれわれの事情は

当時と異なる、帝国主義者と反動派の執拗な孤立・圧殺策動を断固として粉砕し、革命の獲得物を守っていくためには、人民軍を決定的に強化しなければならない、と深い意味をこめて語った。

休みなく続く軍視察とそこから生まれた革命的軍人精神、それを生命力として前進するチュチェの社会主義、このような政治過程を指して将軍は、「わたしの指導は先軍指導であり、政治方式は先軍政治である」と宣言した。

先軍政治方式の出現は、90 年代半ばの世界情勢と切り離しては考えられない。

90 年代初め、東欧社会主義諸国が崩壊すると、帝国主義・支配主義勢力は得たり賢しとわがもの顔に振る舞いはじめた。冷戦の終結とともに、アメリカは「パックス・アメリカーナ(米国一極支配下の世界平和)」戦略を高唱し、他の帝国主義諸国も気勢を上げはじめた。こうして、社会主義は息の根を止められるのであろうか、進歩と正義、平和への人類の志向と念願は夢として終わるのだろうかという危惧が人びとの頭を支配しはじめた。

このようなとき、反動勢力の横暴を制圧する力をはぐくんだのが金正日将軍である。

軍重視を国事の最高原則とし、軍を無敵の強軍に鍛え上げ、それに依拠して帝国主義・支配主義勢力の覇権主義的侵略企図を阻止し、社会主義を力強く前進させようとするのが金正日将軍の卓越した政治知略である。

百数十年に及ぶ社会主義の政治史は、社会主義の本性に適う

政治方式の模索過程であったと言える。

金日成主席はチュチェ革命偉業の開拓初期に、まず朝鮮人民革命軍を組織し、その強化、発展を通じて祖国の解放を達成し、解放後も建国に先立って人民革命軍を正規軍に発展させたのであった。

金正日将軍は、主席の革命闘争史は、軍をまず組織し、それに依拠して革命と建設を勝利へと導いてきた先軍革命指導の歴史であったとし、主席の革命闘争史を先軍革命指導史と規定した。

先軍政治は主席のこの先軍革命指導史の伝統を継承し、発展させたものである。

金日成主席とともに、つとに 60 年代から建軍事業を指導してきた将軍は、90 年代の複雑な情勢のもとで、主席の先軍革命指導の伝統を正確にうけ継ぐことがチュチェの社会主義を守り、完成する唯一の道だとしてこの道を選んだのである。

将軍の先軍政治方式は、国家政治体制によって裏づけられている。1998 年 9 月、最高人民会議第 10 期第 1 回会議は、憲法を改正して、国家機構体制における国防委員会ならびに委員長の地位と権限を格上げし、軍重視の国家政治体制を打ちたてた。

従来、国防委員会は最高人民会議と同常設会議、中央人民委員会の下位にあったが、改正憲法のもとでは、最高人民会議につぐ地位を占め、その法的地位と構成、任務、権限において最高人民会議常任委員会、内閣、地方主権機関、司法・検察機関の上位に立つことになった。

国防委員会委員長は、国家の政治、軍事、経済の全般を統率、

指揮し、社会主義国家体制と人民の運命を守り、国防の強化と全般的国力振興を指導する国家の最高職責であり、祖国の栄誉と民族の尊厳を象徴し、代表する重職である。

この新しい国家機構体制は国家機構そのものを軍事化したものではなく、同体制内で軍事を優先視し、軍事分野の地位と役割を最大限に高めることを目的にその機能を定めたものである。

金正日将軍の先軍政治方式は、このように、軍重視の政治体制によって法的・制度的裏付けを得ることにより、その強固さと力は不動のものとなった。

2　金正日政治の基本的な方式である先軍政治

政治方式は国家政治の成否を左右する重要問題であり、とりわけアメリカとの厳しい政治的・軍事的対峙が続くなかで、社会主義を守り、前進させていかなければならない北朝鮮の場合、政治方式の選択問題は格別に重要な意味を持つ。

今日、北朝鮮が置かれたこのような位置から、もっとも重要な問題は、社会主義を守り、それを強化、発展させることにある。

先軍政治は本質において、軍事先行の原則をもって革命と建設の全般的事業をおしすすめ、軍を革命の柱として社会主義偉業を完成してゆく政治である。

ここで軍事先行とは、軍事を最大の国是とし、軍事力の強化を他に優先させるということである。つまり、軍事を最上位において路線・政策を立て、軍隊を社会のどの集団よりも先に精鋭化し、国防力の強化に最大の力を入れるということである。

革命の力関係という観点からして、先軍政治は革命軍隊を社会主義偉業遂行の主力＝柱＝中核として位置づけ、軍と人民を革命の 2 大勢力、社会的・政治的基盤と見るユニークな方式の政治である。社会主義偉業の進捗にともない、その担い手である主体的勢力を強化することは極めて重要な問題となる。

対内的には、社会主義建設の進行にともなって技術労働者を

はじめ大量のインテリが生み出されることになるが、そのような状況のもとでインテリの革命化に力を入れなければ、革命の大衆的基盤が弱まるであろうし、対外的には、社会主義偉業の遂行を妨害し、社会主義の転覆をはかる帝国主義・支配主義勢力の策動がますます露骨になる状況のもとで、主体的革命勢力の強化がとりわけ重要な問題となるのである。

金正日将軍は主体的勢力関係という見地から先軍政治の持つ意味をつぎのように指摘している。

「現在、われわれはハンマーと鎌の上に銃があると言っています。これは、わが党の独創的な軍事重視思想、先軍政治路線を象徴した言葉です」

先軍政治は、政治と軍事の相互関係において、軍を政治の中心に据えることを求める。

政治と軍事の相互関係をどのように設定し、政治が軍事問題をどのように解決するかということは、政治指導者の政治方式問題以前の、国と民族の運命にかかわる重要な問題である。

だから政治が軍を軽んじて非政治化、非思想化するのは事理にもとる。

先軍政治は軍を革命の大黒柱＝主力の位置に据えることを求めるが、政治的指導者の命令や国家の法制定などの形成だけをもってしてできるものではない。軍を強化し、その役割を高めるためには、国と人民大衆の自主権擁護闘争における軍統帥者の危機管理能力および長年にわたる軍建設の業績、そこから生まれる絶対的な権威と卓越した統帥力に待たなければならないのである。

軍の権威と地位、役割に関する問題は、金正日将軍によってりっぱに解決された。

将軍は軍を完全に掌握し、人民軍は最高司令官の命令のもと一糸乱れずに動く強力な前衛に成長した。

このことについて『ヴォイス・オブ・アメリカ』はこう報じている。

「北朝鮮では、党の指導者金正日将軍が軍を掌握し、軍は金正日将軍を神のように崇拝し従っているために社会主義が揺るがず、北朝鮮の堅固な社会主義のとりでも勝利に勝利を重ねている」

先軍政治方式が軍を革命の柱＝主力に押し立てたからといって、労働者階級をはじめ諸政治勢力の歴史の自主的な主体としての地位が軽視されるということにはならない。

社会主義社会の主人としての人民大衆の地位は社会主義の運命とかかわっているということを忘れてはならない。軍が中核的役割を果たすことにより、社会の発展を促し、社会主義の運命を開いていく人民大衆の自主的な地位はさらに高まり、強固になるのである。革命軍隊は、敵の攻撃から国と民族の自主権を擁護することによって社会の全般的発展を保障し、社会の主人としての人民大衆の地位をゆるぎなく守るのである。

先軍政治は国防力の強化に国費を惜しまないので、国の戦力は極めて強大なものとなる。

今日、そのようにして築かれた北朝鮮の強大な国力にひびを入れ、ひいてはアメリカが支配する東アジアの秩序圏に北朝鮮を包み込もうとするのが、軍事技術的優位に依拠するアメリカの北朝鮮圧殺政策である。

　このような実情を考慮するとき、軍に依拠して帝国主義の策動を粉砕し、社会主義を頼もしく守る強力な政治方式としての先軍政治の持つ意義は極めて大きい。先軍政治の出現は、金正日将軍の正確な政治的判断と、いかなる世界的波動のなかでもチュチェの社会主義偉業を遂行せずにはおかないという不屈の意志と無比の胆力、それに断固たる革命的決断力を持ってはじめて可能であったということをここで強調しておきたい。

3　先軍政治方式の思想的基礎

社会の発展は政治によって進められ、政治の性格と成功のいかんは、政治哲学によって規定される。政治哲学は政治の羅針盤である。

軍事の場合においても、それが依拠する哲学によって軍建設のあり方や軍の性格と役割が規定される。

金正日将軍の先軍政治はチュチェ思想に根ざした政治である。それはチュチェ思想を指導的指針とし、独自の方式で革命を遂行する、実践闘争のなかで創造された政治方式であり、チュチェ思想の要求を全面的に具現した社会主義政治方式である。つまりそれは、軍は党であり、国家であり、人民であるという思想にもとづく政治方式である。

金正日将軍は、帝国主義の包囲のなかで社会主義を建設している朝鮮の場合、強力な革命武力がなければ、人民も、党と国家もありえない、と指摘している。

この指摘は、社会主義社会が軍および労働者階級の党、政権、人民大衆の要求と利害関係、志向と闘争目的が完全に一致している渾然一体の社会であり、軍、党、政権、人民大衆のどの一つが欠けても存立しえない運命共同体的社会であるという思想にもとづいている。

政権と人民大衆が敵対関係にある社会では、軍は党であり、国家であり、人民であるという政治構図は理論的にも実践的に

も成り立たない。先軍政治は軍、党、国家、人民大衆が一心団結し、運命共同体として結集している北朝鮮の社会主義に特有な政治方式である。

軍は党であるということは、軍の創建と目的、使命と政治的性格が党のそれと一致しているという意味である。

労働者階級の党は、人民大衆の自主性を実現するために軍を組織し、軍はその性格と使命から労働者階級の党の指導を仰ぐ。

北朝鮮では党と軍は不可分の関係にある。党は革命の参謀部であり、軍は党の戦略的目標・課題の実現を武力で支える柱である。党と軍の関係でどちらが優先するかといえば、もちろんそれは党であり、軍は党軍として位置づけられる。こうした関係のなかで党は軍の掌握を通してその偉力を高め、全社会の指導をゆるぎなく実現していくのである。

1997 年 4 月 25 日の朝鮮人民軍創建 65 周年慶祝閲兵式でも見られるように、朝鮮人民軍が朝鮮労働党の旗をかかげて歩武堂々と行進する姿に、党軍としての朝鮮人民軍の性格がよく現れている。

つぎに、軍は国家であるということは、政権が銃によって生み出され、銃によって維持されるという思想にもとづいている。

軍と国家政権は性格上同じ系列に属し、ともに労働者階級をはじめ勤労人民大衆の自主性を実現するための政治的武器である。

軍は人民大衆の自主権と利益を武力をもって守り、国家政権はその施策によって人民大衆の利益を実現する。軍と国家はまた、ともに人民大衆の利益を最優先視する革命的・労働者階級

的な性格を持っている。労働者階級の国家は強力な軍に依拠して折り重なる難関を克服し、軍の強化を通して政治的地盤を固めていかなければならない。だから軍が弱体化すると国家も弱体化し、国家政権そのものが危険にさらされる。

世界には、軍隊を持たない国もあるがそれは特殊な例外であって、軍はつねに国家とともに存在し、その第一の使命は国家体制を守り、自主権を擁護することにある。

軍が革命的であれば、人民大衆の社会主義への信念はそれだけ強まり、社会の全領域で社会主義的原則が守られ、社会主義体制はゆるぎないものとなるであろう。

軍は国家であるとする論理は実践上、国防を最大の国是とし、国防力の強化を革命における「天下の大本」とするとき、最高のレベルで具現される。

米ソの冷戦が幕を降ろした1992年3月8日、『ニューヨーク・タイムズ』紙は、米国防省の機密文書『防衛計画指針』をすっぱぬいた。冷戦におけるアメリカの軍事安保戦略の骨組みが明確に叙述されたこの文書の核心は、つぎの表現によって集約されている。

「われわれの第一次的な目標は、旧ソ連その他の地域で新たな軍事強国が再び登場できないようにすることとならんで、潜在的な競争勢力が地域または世界で頭をもたげようという考えを抱かせないようにすることにある」

つまり、アメリカは世界唯一の超強大国の地位を永遠に維持するため、競争相手になりうる世界的規模の覇権国はもとより、地域的な覇権国の出現も許さないとしているのである。

アメリカの『防衛計画指針』は、軍事強国北朝鮮を意識して立てられたという解釈も可能である。実際に、アメリカ軍首脳部は最近北朝鮮を「主敵」と規定している。

北朝鮮は国防を最大の国是とする先軍政治によって、軍事強国としての地位を固めるとともに、強盛大国の建設を戦略的な課題として、確信に満ちて前進している。

先軍政治はまた、軍は人民であるという政治哲学にもとづいている。

北朝鮮の軍と人民は、利害関係の共通性および軍の構成と性格に見られる人民性によって渾然一体をなしている。

人民軍の使命は人民の自主性を擁護し、実現することにある。強力な軍隊があってこそ人民の自主権と利益が守られ、他方、人民の支持を得てこそ軍が強化され、人民の防衛者としての使命を果たせるのである。

一言でいって、北朝鮮では、軍と民衆が要求と利害関係、志向と闘争目的が一致する統一体として存在しており、ほかならぬここに軍民一致の政治的要因があるのである。

軍のためになることは人民のためになり、人民のためになることは軍のためになる。軍隊を持たない人民は、植民地的奴隷の運命を免れず、人民を離れた軍隊は、水を離れた魚のようなものになる。だからこそ、軍と人民は思想と行動をともにし、お互いのためには生命も惜しまないのである。

4　先軍政治は現代社会主義の完成された政治方式

人民のための政治方式

政治とは階級あるいは社会の共同の要請に即して人びとの活動を統一的に組織し、指揮する社会的機能であり、その性格と完成度は、現政治の目的と施策を通して判断することができる。

人民大衆を中心に据えた人民的な政治こそ進歩的な政治だということはよく聞かれる言葉であるが、それがどのように具現されるかは、その政治方式によって左右されると見てよい。

北朝鮮が人民大衆中心の社会主義を建設しているのは、人間を尊重し、人民のための社会主義的政治、人民中心の政治をおこなっているからである。

北朝鮮では、軍と人民の間に敵対的な関係がまったく存在しない。そこでは文字通り、軍にとって人民は父母であり、人民にとって軍は息子、娘である。

人民軍は人民を愛し、国と民族を愛護することを、自己の存在と強化発展の原点としている。

魚が水を離れては生きられないように、遊撃隊は人民を離れては生きてゆけないという抗日パルチザン時代の軍民関係が現在にそのままうけ継がれているのである。

人民軍の使命は人民の安泰と幸福、ひいては自主的発展を守

ることにあるとされているが、人民を愛し人民のためとあらば生命をもなげうつという覚悟ができていなければ、そのような使命は到底果たせないであろう。

朝鮮人民軍が人民をいかに愛し、人民にいかに奉仕しているかということは、1995 年の水害に際して、軍隊がどのように活躍したかを見ればよく分かるであろう。

8 月に入って新義州（シンイジュ）市一帯は連日の豪雨で降水量が平年の 3 倍に達し、鴨緑江（アムノク）は 1935 年の最高記録をはるかに上回る水位 8.05 メートルという数字を記録して氾濫した。なかでも河口付近では数千の人命が危険にさらされる非常事態が発生した。こうした事態を前に、人民軍陸海空軍に水災民を救助せよとの最高司令官の緊急命令が下された。

こうして空からはヘリコプターが、一面海と化した地上には高速輸送艇や水陸両用装甲車が急行して罹災民を一人残らず無事に救い出したのであったが、そこには十余人の新生児も含まれていた。

水害救助活動中、最高司令部では金正日将軍が作戦台の前でずっと指揮を取り続けたが、作戦終了報告に接したとき、新生児まで残らず救ったと聞いて安心した、いま、外国では水害で多くの人命が失われている、しかし、わが人民軍は一人の死者も出さずに全員を救い出した、これはわが人民軍が人民に奉仕する人民の軍隊であることを世界にはっきり示したことになる、と語ったといわれる。

人民を愛し、祖国と民族を愛護する思想・感情は、社会主義祖国の防衛精神と不可分に結びついている。

先軍政治方式の人民性は、それが人民の絶対的な支持を受けていることに現れている。

「祖国の安全と革命の獲得物を守るわが人民軍の使命は、侵略にたいする防御にのみ限られているのではない。火には火で、棍棒には棍棒で制圧するのがわが人民軍の気質である」(1993 年 3 月 29 日、人民武力省第一次官の談話)、「わが人民軍の打撃には限界がなく、その打撃を避けるところはこの遊星上に存在しないということをはっきり知らなければならない。われわれは戦争を望まないが、避けもしないし、一度戦争を押しつけられれば、その機会を逃さないだろう」（1998 年 12 月 2 日、朝鮮人民軍総参謀部スポークスマン声明)などの強硬高圧的姿勢をもって相手を抑える堂々たる人民軍の態度から、人民は先軍政治こそ人民と社会主義の運命を守り、強盛大国の道を開く政治であるとの確信を強めている。

こうして、国と人民の自主権と利益をゆるぎなく守る人民軍への全党、全人民の信頼と支持、愛情はいつにもまして高いレベルに達し、北朝鮮の民心はますます人民軍へと傾いている。

人民軍なしにはなにもできないということが、今日の厳しい試練のなかで、北朝鮮人民が肌で学び取った貴重な真理である。

このようにして、金正日将軍を中心とする人民軍と人民の一心団結は、国の政治力を非常に強めている。

自主を保障する政治方式

政治の性格と完成度はまた、国と民族、人民の自主権と尊厳

をどれほど強く守っているかということによっても判断される。

冷戦終結後、世界の一極支配をめざすアメリカの戦略によって、多くの国と民族がその支配下におかれた。

1996 年 1 月 1 日号の『ニューヨーク・タイムズ』紙は「アメリカ合衆国の第 3 帝国』と題する記事でボスニア・ヘルツェゴビナにおけるアメリカの軍事行動は、ペルシア湾からバルカンに至る地域が「アメリカ合衆国の第 3 帝国」の心臓部になりつつあるという印象を与えていると指摘した。

これは 200 余年のアメリカの歴史を分析したうえでの指摘である。

1898 年、アメリカはスペインを破ってキューバ、プエルト・リコ、フィリピンを手に入れたが、これが「アメリカ合衆国の第１帝国」であり、第２次世界大戦の終結後、ヨーロッパに NATO を設け、東アジアでも一連の相互防衛条約を結んだが、これが「第２帝国」である。ところで冷戦の終結とソ連の解体を奇貨として、アメリカは中近東とバルカン地域に軍事介入し、その「管轄地域」の拡大によって、いまや「第 3 帝国」を作り上げつつあるとしたのである。

しかし、アメリカは、湾岸戦争とボスニア・ヘルツェゴビナ事態後もペルシア湾・バルカン地域に「第 3 帝国」を築くことができなかった。

そこでかれらは、1998 年～1999 年にも対イラク空襲を続ける一方、ユーゴスラビア連邦への武力干渉に乗り出したのである。その目的はなによりも重要資源が豊かに埋蔵されており、しかも軍事戦略的要衝地帯であるペルシア湾とバルカン半島を

支配下に置き、ひいてはここを「21 世紀に向けた NAT0 の新戦略」の実験場として、NATO を国際憲兵化し、それを踏まえて世界の一極支配を確立するということにあった。

アメリカは東北アジアにおいても同じ文脈で北朝鮮の圧殺をはかったが、強大な国防力を誇る北朝鮮の強硬な対応を前にして、それは一場の夢と化した。

先軍政治によって鍛え上げられた朝鮮人民軍は、いかなる大敵をも一撃のもとに撃滅し、国の自主権をゆるぎなく守るだけの実力を備えていたのである。軍事力が弱ければ、国の自衛は不可能である。この一事をもってしても、先軍政治方式は、帝国主義・支配主義勢力の挑戦を退け、国と民族の自主権を守るための完成された強力な自主的政治方式であることがうなずけるであろう。

先軍政治は厳しい情勢のなかで、チュチェの方式＝独自の方式で社会主義建設をおし進める政治方式である。

自主独立国は当然、政治活動で主体性を確立すべきであり、自国の利益と意向にそって国と人民を導いていかなければならない。

金正日将軍は、「チュチェの方式」「われわれの方式」を、国政の基本的方向として定め、先軍政治によってそれを貫くよう導いている。

「われわれの方式」で生きるということは、チュチェ思想が求める通りに、自己の信念をもって考え、行動し、すべての問題を自国の革命と人民の利益に即して自力で解決していくという、言いかえれば、どこからどのような風が吹いて来ようとも、ま

た、他人がなにをしようとも、それに左右されずに、チュチェ思想の旗を高く掲げ、チュチェ思想の要求通りに生きてゆくということである。

これは、他人の考え方ややり方に眩惑されることなく、チュチェ思想に立脚して、すべての問題を自国の革命と人民大衆の利益を守り、国情に即した方向で、いっさい他人に頼ることなく自力で、責任をもって解決していくということである。こうした意味で、「われわれの方式」とは自主と同じ意味の用語だと言ってよい。

北朝鮮が「苦難の行軍」と強行軍を勝ち抜き、強盛大国の建設に取り組めるようになったのも、革命と建設を自力更生の原則に立って「われわれの方式」でおしすすめてきたからである。

西側諸国では北朝鮮が「1995 年 12 月に崩壊する」「1996 年下半期に崩壊する」などという憶測が飛び交い、北朝鮮の瓦解は時間の問題とされていた。

この厳しい時期に、北朝鮮では「自力更生だけが生きる道だ」というスローガンが高々と掲げられていた。

制裁であれ封鎖であれ、勝手にするがいい、われわれは決して他人の奴隷にならない、というのが自立的に生きるわれわれ朝鮮人民の気概だ。民族の自主権は誰かの贈りものでもなければ、天から降ってくるものでもない。われわれは自主に輝く社会主義朝鮮の尊厳をあくまでも守って自主の道を力強く進むであろう。世界は 21 世紀に、自立経済を持つチュチェの強盛大国＝社会主義朝鮮を必ず目にするであろう。これが北朝鮮の主張であり、立場である。

この「われわれの方式」「チュチェの方式」の革命路線を裏うちしているのは、強大な自衛力である。先軍政治は強大な自衛力を備えることによって、外部勢力の威嚇や懐柔をともに退け、そうしたなかで、主体的かつ自立的な革命路線に沿って北朝鮮はひきつづき力強い前進を続けているのである。

平和を守る政治方式

平和は人間の本性的要求であり、人類の普遍的な志向・念願である。今日、地球上に生きる人びとは、戦争のない平和な世界で暮らすことを切実に願っている。

人類のこの念願を反映し、平和を志向する政治は進歩的な政治であり、そうでない政治は反動的な政治である。帝国主義・支配主義勢力の専横がいつにもまして露骨になっている今日、戦争を防ぎ平和を守ることは、遅滞を許せない人類の緊急課題である。

朝鮮半島は常時戦争の危機にさらされているが、北朝鮮は先軍政治によって危機を克服し、朝鮮半島の平和を頼もしく守っている。

最善の戦争防止策は、戦争勢力を制圧するに足る強力な武力を持つことである。侵略と戦争の勢力にたいしては、強力な軍事力をもって対応してこそ平和が守られるのである。

1582 年 9 月、李王朝の重臣李珥（リイ）が、10 年後に日本の侵入が予想されるとして 10 万の兵力を養うよう、王に建議したことがある。

王は、この太平の世に養兵とは何事だとして、耳を貸さなかった。ところが、それから 10 年たった 1592 年、日本軍が朝鮮侵略に乗り出したのである。20 万の日本兵は 1 か月足らずで朝鮮半島の大半を占領し、ここで朝鮮人の鼻や耳を切り取って塩漬けにし、豊臣秀吉に送り届けるなどという鬼畜のような屠殺行為をくりひろげた。

10 万養兵の建議を聞き届けていたら、こんなことにはならなかったであろうと、王はほぞをかんだが、後の祭りであった。

この出来事は、国を守るためには、強力な国防力を備えなければならないという深刻な教訓を残した。

不当な自己本位の要求を突きつけ、国連も無視して主権国家に侵略兵力を送り、平和的住民にたいする無差別爆撃もはばからない覇権主義的強権政治が乱舞する今日の複雑多端な情勢は、軍事力の強化に力を入れなければ祖国の安泰をはかれないということをまざまざと見せつけている。

近年、北の先軍政治への共感が国際社会はもとより、南朝鮮の各階層人民の間でもとみに強まっていることはよく知られている通りである。

先軍政治は社会主義偉業の勝利の前進を裏うちする政治方式である。このことは北朝鮮の現実がよく示している。社会主義政治は、軍重視の先軍政治となるとき、もっとも強力な政治となるのである。

情勢が緩和したからとて国防力を弱めてはならない。そうなれば取り返しのつかないことになる。1941 年 12 月の真珠湾奇襲を前に、日本がアメリカに和平攻勢を掛けたことや、1941 年

6 月のソ連侵攻を前にヒトラーがソ連と不可侵条約を結んだことなどからも分かるように、相手国に油断させておいて、奇襲を掛けるのが侵略者の常套手段である。1950 年 6 月 25 日の朝鮮戦争でも同じような手法がアメリカによって取られている。

以上見てきたように、先軍政治は平和の擁護と社会主義の前進にとって、最善の革命的政治方式であると言える。

5　先軍政治は勝利の宝剣

社会主義を守る必勝の宝剣

アメリカの対北朝鮮政策作成担当者ポールは、「現在の北朝鮮の状況からすれば、朝鮮半島ではすでに社会主義の存在が消滅していたはずである。ところが、北朝鮮人が言う朝鮮式社会主義は依然として存在し、アメリカと西側世界に強腰で挑戦している。最近アメリカ政界で論議の的となっている強力な北朝鮮の存在意味を金正日最高司令官の登場と結びつける評価は、われわれ政策作成者の見解と一致しているが、これは偶然なことではない」と語ったことがある。

北朝鮮の存在意味を金正日将軍の政治指導力に求めるのはまったく正しい見解だと言える。

「核疑惑」「ミサイル危機」「地下核施設査察」など、力による北朝鮮の圧殺をはかってきたアメリカはそれがことごとく失敗すると、90 年代の末から北朝鮮の軍事力弱体化と内部崩壊を夢想して宥和策へと方向を転換した。

1999 年 5 月末、アメリカ大統領の特使ペリーが平壌（ピョンヤン）を訪れた。その目的は、冷戦終結後の世界制覇戦略にもとづく東アジア秩序圏への北朝鮮引き入れを策する対北朝鮮政策の調整をはかって、一連の政治的取り引きをおこなうことにあると見られた。

かれの平壌訪問に時間を合わせてアメリカは、ユーゴ連邦の首都ベオグラードとセルビアに、空襲開始以来最大の出撃回数をもって猛烈な爆撃を加えた。これは、北朝鮮に屈服を求める一種の警告であった。世界は息を殺して事の成り行きを見守った。このとき、平壌は人びとの意表をつく衝撃的なニュースを流した。

金正日将軍が朝鮮人民軍近衛ソウル金策(キムチェク)第 4 歩兵師団を視察したというのである。従来の軍視察報道の形式とは異なって、視察の対象が公式の名称で報道されたことに世界のマス・メディアと軍事界は注目し、近衛ソウル金策第 4 歩兵師団についての情報を集めた。

第 4 歩兵師団は 50 年前の朝鮮戦争の際、開戦後数日にしてソウルを解放し、大田ではディーンのアメリカ第 24 師団を壊滅させるなど多くの戦いで勇名をとどろかせた鋼鉄の師団であった。

これは、金正日将軍がアメリカ帝国主義者にたいしていささかの妥協もありえないことを示威したものと解釈された。

ペリーの訪朝後、アメリカは対北朝鮮政策調整問題で数か月間頭を悩ました末、ベルリン朝米共同コミュニケとニューヨーク合意にもとづいた報告書を発表せざるをえなかった。共和党はこれに反発して、いま一つの報告書を公表した。

ペリーはアメリカの対北朝鮮政策報告書の発表と関連して、『PBS(米公営テレビジョン放送)』とのインタビューでつぎのように答えた。

記者：圧力の行使による北朝鮮の崩壊を仮定するのは間違い

であるというが、そのような結論を下した背景はなにか。

ペリー：観測者は北朝鮮が深刻な経済危機によってすぐにも崩壊するものと判断している。協商は不要で、崩壊を待っていればよいということである。

しかし、そのような状況を想定し、それに依拠すべきではない。

北朝鮮の体制は極めて強力な統制力のもとにある。北朝鮮の体制をそのままにしておこうと言うのではない。北朝鮮は極めて強力な統制下にあるということを強調したいのだ。北朝鮮が直ちに崩壊すると想定するのは軽率な判断だ。

北朝鮮政権がわれわれが望む通りになるという判断をもって協商するのではなく、現状そのままの北朝鮮政権と協商しなければならないだろう。

2000 年 1 月の年頭教書で、クリントンが「世界でもっともよく訓練され、装備がもっとも充実した軍の維持」を訴え、国防長官コーエンが米軍を「地球上で最高の準備態勢と装備、出動能力を備えた」軍隊に作り上げると豪語するなど、アメリカは冷戦後、軍事力の絶対的優位にもとづいた世界制覇戦略の実現に総力を上げてきた。

いまやかれらは、国連憲章も国際法も無視し、強権と専横をもって世界を意のままに動かそうとする企図を公然とさらけ出している。

例えば、上院外交委員長ヘルムズは国連安保理事会における演説で、国連がアメリカの意思通りに改革をおこない、「アメリ

カの効果的な外交用具になるべきだ」「アメリカの国内法は国際法の上位にある。他国にたいするアメリカの行動は国連の委任を必要とせず、国連はアメリカの政策にたいして意見を述べる権利がない」とし、国連が権限の行使へと動くならば国連脱退も辞さないと威嚇した。

世界は驚愕し、「アメリカは世界を奴隷社会に逆戻りさせ、自分らはそこに君臨する奴隷主になろうとしている」と非難した。

無力な国は無法な言いがかりをつけられて、白昼ミサイルの洗礼を受けても訴えどころがなく、死か奴隷かの二者択一を迫られているのが現状である。

しかし、先軍政治に支えられた北朝鮮だけは、力には力で対抗し、傲慢な武力行使には仮借のない懲罰をもって応えている。

1998 年 8 月 31 日、北朝鮮最初の衛星発射を機に、朝米関係は再び最悪の状態に陥った。クリントンが急遽ソウルに飛んで、南朝鮮駐留米軍の動員態勢と飛行隊の非常出撃準備状況を点検する一方、北朝鮮の「核開発」に難癖をつけて、「アメリカはアメリカ国民と友邦を守るためにどんなことでもする覚悟ができており、その能力がある」と大言壮語した。アメリカのタカ派は「米朝基本合意文の破棄」「断固とした対応」などと騒ぎたてた。米軍部は「北朝鮮への進攻を予見した新戦争計画を完成しつつある」とし、朝鮮戦争惨敗の恥をそそぐべく、第 2 の北朝鮮侵略戦争をもくろんだ「5027 作戦計画」を公開した。

これにたいする北朝鮮の対応は断固としていた。

1998 年 12 月 2 日の朝鮮人民軍総参謀部スポークスマンの声明は、「外科手術式打撃」とか、「先制打撃」という「打撃」は決し

てアメリカだけの選択肢でなく、その打撃方式も決してアメリカの独占物ではない、人民軍の打撃には限界がなく、それを避ける場所はこの遊星上にない、アメリカだけでなく、それに追従する「韓国軍」と日本も同じく打撃目標になるであろう、われわれは戦争を望みはしないが避けもしない、いったん戦争が強要されたら、二度とその機会を逃さないであろう、という強硬なものであった。

国の自主権を侵害しようとする相手にたいしては、それが地球上のどこにいようとも仮借のない打撃を加えるというのが、先軍政治の社会主義守護原則であり、方法論である。

1998 年 9 月、平壌・金日成広場における共和国創建 50 周年慶祝行進のアメリカ向け実況放送で、CNN 特派員チノイは、こう報じた。

「領袖と大衆が一丸となったこのような特異な政治体制は世界にたぐいがない。北朝鮮の最大の威力はここにある。今日、北朝鮮では老若男女を問わず、誰もが金正日指導者のためなら肉弾となる覚悟ができている。

実際、西側はこのために北朝鮮を恐れ、核兵器を所有しながらも、容易にこの国に、手出しができないのである」

強盛大国建設における創造の宝剣

先軍政治は人民軍を祖国の守護者としてだけでなく、人民の幸福の創造者として押し立てる政治方式である。

今日、幸福の創造者としての人民軍の面目が躍如としている

のは、強盛大国の建設においてである。
強盛大国の建設で、人民軍は大黒柱＝先鋒としての使命をりっぱに果たしている。
金正日将軍は 21 世紀における強盛大国の建設構想を示し、「わが国、わが祖国の大地に一日も早く社会主義強盛大国を建設して、いかなる敵もあえて手出しができないようにし、全人民がなんの不安もなく幸せに暮らせるようにすることが、わたしの構想であり、確固とした決心です」と語った。
90 年代後半に遭遇した北朝鮮の試練は、最悪、最大の試練であった。北朝鮮人民はこのきびしい試練の日々、他国の人なら数百回も倒れたであろう絶体絶命の死線に立たされもした。
雑誌『民』2000 年 1 月号は、「では、もっともきびしい試練であった『苦難の行軍』の過程で、難関と逆境を乗り越えることのできた力は何であったろうか」という疑問を出し、金正日将軍の先軍革命指導＝先軍政治にその回答を見出している。
北朝鮮は先軍政治のゆえに強盛大国の建設という明るい展望を示すことができ、1998 年 8 月 31 日の衛星「光明星 1 号」の発射を合図に、その実行段階に移った。
では、先軍政治は強盛大国の建設でどのような役割を果たしているのだろうか。
北朝鮮における強盛大国の建設は、もっとも苦しい時期に開始されたという意味で、とりわけ困難な大課題である。
この至難の課題を他人の力や、なにか物質的・経済的な力に頼るのでなく、建設にじかに取り組む軍と人民の力を最大限に汲み上げて進めようというのが、金正日将軍の構想・意図である。

将軍は、祖国の守護者、人民の幸福の創造者である人民軍が当然社会主義建設でも先鋒になるべきであるとし、電気、食糧、石炭、金属、鉄道輸送をはじめ、社会主義建設の主要部門を人民軍に受け持たせ、強盛大国建設の突破口を開くようはからった。

軍は、将軍の強盛大国建設構想を体して、祖国の防衛も社会主義建設もみなわれわれが受け持とう、というスローガンをかかげ、革命的軍人精神をもって強盛大国建設のもっとも骨の折れる主要部門に進出し、突破口を開いている。

江原(カンウオン)道と平安(ピョンアン)北道をはじめ全国各地で耕地を社会主義にふさわしい大規格田野に作り変えるための大自然改造事業がおしすすめられ、九月(クウオル)山、七宝(チルボ)山、正方(チョンバン)山など国内の名勝が、人民の社会主義的生活を潤すために、より美しく作り変えられている。

耕地の整理によって江原道では、延べ 1 万 2,000 余キロものの畔が 5,600 余キロに縮小し、23 万 3,800 余にのぼる小区画の田圃が 6 万 5,500 余の規格化田圃に整理された。こうして新たに得た作土は 1,760 余ヘクタールに達した。

江原道に続いておこなわれた平安北道の耕地整理もわずか 5 か月で完了し、5 万余ヘクタールの田野が大規格耕地に変容した。延々 40 キロの雲田(ウンジョン)平野と博川(バクチョン)平野、竜川(リョンチョン)平野など西海沿いの田野だけでなく、寧辺(ニョンビョン)の館下(コワンハ)原、泰川(テチョン)のハンドゥレ原、義州(イジュ)の弘南(ホンナム)原など中間・山間地帯の田野も広々と開け、多くの土地が新規に開墾された。

耕地の整理以外に、平壌―元山(ウオンサン)間観光道路補強工事をはじめ、連年の大水で甚大な被害を受けた河川や橋梁、堤防、道路の復

旧工事も人民軍が担当し、いずれもりっぱに遂行した。
いま、北朝鮮では、「苦難の行軍」で最大の難事とされた食糧の自足対策が積極的に講じられており、経済の全般が活性化しつつある。
将軍は、食糧問題の解決策としてジャガイモの大量作付けを奨励し、その方向と方途を教え、具体的な指導をおこなっている。
ここで、両江（リャンガン）道の大紅湍（テホンダン）郡の農場がジャガイモ栽培のモデル農場として指定され、技術者や働き手が続々と送りこまれている。
将軍は、1998 年 10 月と 1999 年 8 月、2000 年 4 月など、現地をしばしば訪れて、ジャガイモの栽培状況を視察し、運輸機材その他の営農資材を優先的に送るなど、懸案問題の具体的な解決策を講じる一方、ジャガイモ栽培の先頭に立ってりっぱに働いている除隊軍人とも会って、かれらの功労をたたえ、励ましている。
将軍は、除隊軍人は、祖国の防衛で軍功を立て、いまは、農業戦線で党の意図を貫くために奮闘している真の革命家、熱烈な愛国者であり、不屈の闘志をもって、大紅湍を住みよい土地に作り変えた何者にもまして誇り高い前衛闘士だとたたえ、祖国と人民の幸せのために青春を捧げている諸君の偉勲を孫子たちは忘れず、いつまでも誇らしく追憶するであろうと言った。
将軍は、除隊軍人の新居にも立ち寄り、生活上困っていることはないか、父母の訪問を受けたかなど、かれらの生活に深く心を配った。
将軍の温情に励まされた大紅湍の除隊軍人は、いま、兵士時

代に劣らず革命的軍人精神を大いに発揮して働いている。

北朝鮮がめざす強盛大国は自力更生の強盛大国である。

人民軍が自力更生の旗をかかげて軍の生計を自力で立てているのはもとより、強盛大国の建設で持ち上がるすべての問題を自力で解決している。

人民軍は「自力更生だけが生きる道だ」というスローガンをかかげて、いたるところに現代的施設の食品加工工場や牧場、養魚場、発電所を建設して全社会に手本を示している。

軍は、今日のための今日でなく、明日のための今日を生きようという金正日将軍の思想をもって、中隊芸術サークル・区分隊芸術宣伝隊・軍人家族サークル活動をさかんにおこなって革命軍歌をはじめ党・領袖頌歌、祖国賛歌を全国にこだまさせており、またモデル兵営を通してすべての軍部隊が文化的な生活を営むよう心がけるなど、全軍に新しい社会主義文化気風をうちたて、軍内はもとより全社会にそうした気風がみなぎるよう努めている。

人民軍の創造的な力は困難が大きいときほど、より強く発揮されている。北朝鮮での強盛大国建設は、人民の幸福の創造者としてのこの人民軍の創造的な力を背景にして構想され、実行されている。

そのような意味で、先軍政治は強盛大国建設を力強くおし進める創造の宝剣だと言われているのである。

不可能というものを知らない人民軍を創造の宝剣とする金正日将軍の先軍政治は、強盛大国の建設を必ずやなしとげずにおかないであろう。

6　先軍政治方式と 21 世紀

祖国統一につながる愛国の政治

21 世紀における朝鮮民族の最大の課題は祖国の統一である。

この重大な民族的課題が新世紀に持ち越されたのは、朝鮮民族が統一を望んでいないからではない。

朝鮮民族にとって統一は生命であり、民族的繁栄の礎であり、全人民の切願である。

祖国の統一は本質において、断たれた民族の血脈を一つにつなぎ、民族の和合と団結を実現し、全国的範囲で民族的自主権を確立する事業である。ここで、外部勢力の干渉や支配は統一の最大の障害であり、なによりも先に排除されるべき対象である。

アメリカは半世紀以上も祖国の南の地を占領している。かれらはここに最新装備の 4 万になんなんとする米兵を常駐させ、1,000 余の核兵器を展開し、鴨緑江、豆満江までをも支配下におこうと、北侵の機会を虎視眈々と狙っている。

民族分断の元凶アメリカの南朝鮮占領が続くかぎり、統一志向の政治は当然軍重視の政治になるべきであり、現実的には自主統一をめざす北朝鮮の先軍政治にそれを求めるべきである。

先軍政治は朝鮮全土の植民地化をはかるアメリカの戦略的企図を破綻させ、祖国統一の平和的環境をもたらす根源的な力で

ある。

自主民族として生きようとする朝鮮民族の統一悲願を踏みにじって、北朝鮮まで呑み込もうとしているのがアメリカである。

このような状況で、朝鮮民族が主人となる完全自主独立国こそ真の意味での統一であり、アメリカによる全朝鮮半島併呑は統一でなく、亡国である。

アメリカの北侵戦略企図を粉砕することは、民族の完全な植民地化を防ぎ、自主統一を果たすための前提であり、最短コースである。

19 世紀の末、朝鮮侵略熱に浮かされていた日本と同じように、それから 100 年たったいま、アメリカはなんとしても全朝鮮を手の内に入れようと狂奔している。

1999 年を迎えてクリントンは、2000 会計年度の国防費に 120 億ドルの追加予算案を国会に提出した。当時、大統領特別補佐官はこれについて、「軍事費の増額は北朝鮮情勢を視野に入れたもの」だと説明し、日本のマス・メディアは「クリントン政権は韓半島有事に対応する軍事力の整備に着手した」と報じた。

この年の初め、国防長官コーエンは日本と南朝鮮に飛んで、米日南朝鮮 3 角軍事同盟にもとづくアジア太平洋地域軍事防衛態勢の構築と「新アジア太平洋地域安保戦略」の落着をはかって、奔走した。

これに先立って南朝鮮を訪問した日本防衛庁長官野呂田は、板（パン）門店（ムンジョム）にまで現れて、同年上半期内に日本自衛隊と南朝鮮軍間の非常連絡網を形成し、連絡事務所を設けることをはじめ、「本格的軍事協力の時代」を開く問題を謀議し、一連の合意を見た。そ

れは日本南朝鮮軍事同盟条約の締結を念頭に入れたものであった。

世界はこの前例のない動きにたいし、アジア版 NAT0 創設が最終段階を迎え、その輪郭が次第に浮き彫りにされつつあると評した。

アメリカと日本は軍事同盟関係にあり、アメリカと南朝鮮も同じく軍事同盟関係にあるいま、日本と南朝鮮が結びつけば 3 角軍事同盟は完成し、東北アジアに軍事ブロックが形成されるのである。

日本と南朝鮮が一連の軍事問題で合意し、本格的な軍事協力の時代を迎えたことは、日本と南朝鮮が軍事的に結びつき、3 角軍事同盟の地ならしが完了したことを示している。

こうして、いまや戦域ミサイル防衛体制の導入問題が本格的な上程・推進段階に入り、また敵国(北朝鮮)にたいする攻撃と完全占領を狙う「5027 作戦計画」が謀議されるなど、米日南朝鮮 3 角軍事同盟は具体的に動きはじめている。

アメリカが 3 角軍事同盟の創設に奔走しているのは、アジア太平洋の世紀とされる 21 世紀に向けた準備工作であり、具体的には、朝鮮半島の完全掌握によって、ここをアジア太平洋地域支配の拠点とするためである。

アメリカのそうした企図が阻止できなければ、全朝鮮民族は、21 世紀に、分断民族の悲運を越える亡国の民の運命に突き落とされるであろう。

アメリカの北朝鮮侵略企図を阻止するためには強大な軍事力に頼るほかない。それによって第 2 の朝鮮戦争を防ぎ、平和を

守ることができるのである。こうしてみると、先軍政治によって育まれた北朝鮮の強大な軍事力こそ、アメリカの全朝鮮半島支配戦略を破綻させて民族の分断にピリオドをうち、自主的統一を成就する平和的環境醸成の前提だと言える。

先軍政治に民族統一の意思がこもっていることは、1995 年 1 月 1 日の金正日将軍の軍視察がよく示している。

金日成主席の逝去後、最初におこなわれた現地指導・軍視察は、先軍政治によって当面の難局を打開し、チュチェ偉業を完遂するという政治構想を示したもので、将軍は、強大な人民軍が存在するかぎり祖国統一は必ず成就されるであろうし、チュチェ革命偉業の完成は確定的である、強大な人民軍を持っていることは民族の最大の誇りであると言明した。

将軍は、祖国解放 52 周年を控えて発表した力作『偉大な領袖金日成同志の祖国統一遺訓をあくまで貫こう』(1997 ・ 8 ・ 4) で、「金日成同志が開き導いてきた祖国統一偉業を継承し、われわれの代に必ず祖国を統一しようとするのは、朝鮮労働党の確固とした決心であり、朝鮮人民の革命的意志である」と強調している。

先軍政治のこのような民族統一意志は、強大な軍事力を背景にしてこそ統一が可能であるとしているが、これは決して武力で国を統一するという意味ではない。

南朝鮮では軍事問題と結びついた統一論議は北侵武力統一を念頭においてなされているが、先軍政治は軍事を統一と結びつけて論ずる場合、アメリカの北侵武力統一企図を破綻させ、自主的な平和統一を遂げることを念頭においている。つまり、人

民軍の銃が強力であってこそ平和が保たれ、祖国統一の道が開かれると強調するのである。

こうした先軍政治の自主・平和統一意志は、金正日将軍の 1997 年 8 月 4 日の著作や 1998 年 4 月 18 日の著作『全民族が大団結して祖国の自主的平和統一を成就しよう』などで表明されている。

金日成主席によって示された祖国統一 3 大原則と全民族大団結 10 大綱領、高麗(コリョ)民主連邦共和国創立方案を祖国統一の 3 大憲章とし、民族自主の原則にもとづき、愛国愛族の旗、統一の旗のもとに団結して北南関係を改善し、外部勢力の支配と反統一勢力に反対してたたかい、全民族が相互往来し、接触、対話することによって連帯連合を強化することを骨子とする民族大団結 5 大方針の提示がその要諦である。

21 世紀に向けた民族統一の大綱であるこの愛国愛族の統一観を実践に移す使命を担っているのが、ほかならぬ先軍政治である。

今後、北朝鮮とアメリカの関係がどのように動くかはさておき、明白に言えることは、北朝鮮とアメリカの関係の正常化も民族統一問題もすべて北朝鮮の強大な軍事力に裏づけられて解決されるであろうという点である。

新世紀を主導する正義の政治

侵略と戦争のない、すべての国と民族が自主的かつ平等に生きる平和な世界の建設こそ、人類が 21 世紀に果たすべき最大の課題である。

冷戦の終結後、アメリカは一極世界秩序に向けて「世界化」戦略をうちだした。

世界化とは、世界の政治、経済、文化などすべての分野をアメリカ式に作り変えようとするものである。

この世界化戦略の実現を力の優位にもとづく軍事行動によって果たそうという意図のもとに、1999 年、アメリカ国家安全保障会議は「21 世紀アメリカの新戦略」草案なるものを発表した。ここには、アメリカの「世界的な指導的地位を確認」するため、新世紀にも「スイング戦略」および地域紛争介入政策をひきつづき実施する、と明示されている。

アメリカのスイング戦略の一方に第 2 の朝鮮戦争が想定されていることは世界に広く知られていることである。-

アメリカ国家安全保障会議が 50 数年ぶりに、国家安全にかんする包括的な検討にもとづいて作成したいま一つの文書には、「アジアとりわけ北東アジアが大戦勃発可能性が最大の地域」とし、「北朝鮮のひきつづく軍事的脅威」を「膺懲」するため、国内深くにある軍事基地をトマホークおよび空母をもって攻撃するという具体的な作戦計画まで示されている。にもかかわらず、アメリカの作戦計画は実現不可能と認められている。

それは、北朝鮮にたいするアメリカの戦争計画が先軍政治の前には、そのどれもが無力だからである。冷戦時代の国際勢力関係は米ソの対決構図として特徴づけられていたが、冷戦後のそれは北朝鮮とアメリカの対決として特徴づけられよう。

この対決には、朝鮮半島における戦争と平和の問題に限られることなく、世界的規模における戦争と平和、ひいては人類の運命という重大問題がかかっている。

この対決で、キャスチングボートを握っているのは先軍政治に支えられた北朝鮮側であり、北朝鮮は、国際問題がアメリカによって操られることを防ぐ一方、自国の影響力を世界に広げている。そのことは多くの国が国の自主権は銃によって守られるという認識のもとに、軍重視の方向に動いていることから確かめることができる。

例えば、ロシアは、2000 年 2 月 4 日、プーチン大統領(当時は大統領代理)の参加のもとに開かれたロシア連邦安全理事会で、「ロシアと同盟国の国家安全が直接脅かされる場合、ロシアが核兵器を使用することは可能」であるとする軍事原理を採択した。

冷戦終結後の 10 年間つまり 1990 年代は、帝国主義者が「社会主義の実験の失敗」「資本主義の永遠の時代の到来」と喧伝した年代であったが、それがまったくのでたらめであったことが、いまや白日のもとにさらけだされている。他方、先軍政治は社会主義理念をこの 90 年代に完成させてチュチェの社会主義を固守し、その優位性を誇示することによって科学としての社会主義が必勝不敗であることを実証したのであった。

Ⅱ　先軍政治の具現

1　無敵必勝の強軍を育成

思想の強軍、領袖擁護の軍

先軍政治とも関連して朝鮮人民軍は世界の注目を集めている。南朝鮮のマス・メディアは、90 年代半ば、事故で海上を漂流中、南に抑留された数名の人民軍兵士が見せた不屈の気概に感嘆し、「北の人民軍は、政治的、思想的な面で一等級の軍人気質の所有者」だと評した。

かれらは、南側当局の転向勧誘や威嚇、誘惑にいささかも屈せず、金正日頌歌『あなたがいないと祖国もない』を歌い「父母の膝元を離れては生きてゆけるが、金正日将軍のもとを離れては生きてゆけない」という毅然とした姿勢を崩さなかった。かれらは訊問中、「金正日将軍の名を尊称つきで呼ばないならなにも答えない」ときめつけ、所属と姓名を「敬愛する金正日将軍の戦士 OOO」と言い切った。

高級洋服を見せて帰順を勧めると、「最高司令官同志からいただいた軍服を着、主席の肖像バッジを胸につける」と頑強に抗議して主張を通した。南朝鮮に残るなら自家用車に金の腕時計、豪華住宅をやろうという懐柔には、「われわれ将軍の戦士には、将軍のそばを離れたいかなる生活もありえない」と一蹴した。拷問や欺瞞に失言するようなことがあってはと、舌を噛み切ろうとして、夜中に意識不明に陥った兵士もあった。

こうした強い精神力の前に、南朝鮮当局は強権をもってしても、また、思想・理念の対決でも人民軍兵士を屈服させることができず、かれらの気概を人民軍にだけ見られる精神的気質だとして舌を巻いたのであった。これは、朝鮮人民軍こそ世界のいかなる軍隊も及びのつかない思想の強兵であることをまざまざと見せつける出来事であった。

軍の風貌は全的にその指導力とかかわっている。

軍の指導と言うとき、それは武装力を構成する人間と装備を念頭においている。ここで両者のどちらを基本として見るかによって、軍建設の路線・政策が根本的に異なったものとして立案され、軍事力強化のあり方や軍の風貌が決まるのである。

戦争の勝敗が力の自乗法則によって決まるとする数の優位論や、原爆出現後の核兵器万能論をはじめとする技術優位論＝兵器中心論はいずれも、武装力のレベルによって勝敗が決まるとする軍事原理にもとづいたもので、ここでは銃を取る人間の思想・精神力が軽視されている。兵器中心論では、軍人はたんにその多寡のみが問題とされる人的資源として扱われる。

従来の政治方式はこうした観点から、軍建設の総体的方向を兵器の増強に求め、軍人を動かすのに主としてカネの力に頼っている。カネと占領地の略奪で軍人を誘惑し、戦場にかりたてるのが、かれらの常套的な用兵術である。だからそのような国の軍人は戦いが不利になると、簡単に手を上げたり、逃走したりするのである。戦場で命を惜しむそのような軍人の集団は、いくら最新兵器で武装していても真の強兵にはなれない。しかし、朝鮮人民軍はなによりも軍人の精神力を重視し、思想によ

る強兵策を軍建設の根本原則としている。

金正日将軍は、敵との対決は軍事力の対決であると同時に、思想の対決である、わたしは、軍建設と軍事活動でも思想論を主張する、軍事的打撃力には限界があるが思想には限界がなく、その威力は原爆よりも大きい、軍事力における基本は、人びとの思想意識である、と強調している。

これは、軍人は自主的な思想意識を持つ尊厳ある存在であり、軍人の思想、意識によって、軍事力も戦争の運命も決まるという思想論の表れである。

軍の威力や戦争の運命が、数的ないし技術的優劣によってでなく、思想の力によって決まるということは、歴史によって実証されている。このことはソ連や東欧諸国で社会主義の挫折に先立って軍が思想的に瓦解していたということからも確認されている。

ソ連の元国防相ヤゾフは、自著でソ連崩壊の要因を軍建設の視点からとらえて、こう指摘している。

「物質の面でソ連は経済大国・軍事大国でありながらも、あっけなく崩壊してしまった。300 余万の大軍と、世界一流の最新装備を誇っていたソ連軍は、戦時でもない平時に、党と社会主義を守れなかったし、自らの存在も維持できなかった。

なぜか?　それは西側とのイデオロギー闘争で敗北し、武装隊伍が思想的に瓦解していたからである」

それでは、思想的強兵策を軍建設の根本原理とし、建軍後一貫して軍人の思想教育を先行させてきた人民軍が、1990 年代後半の複雑な情勢のもとで前面に押し出した思想的強兵策とはど

のようなものであろうか。

金正日将軍は 1995 年の新年に際して、革命軍隊の威力は本質において思想の威力であり、したがって人民軍を無敵必勝の鉄の戦闘隊伍に強化発展させるためには、軍人の思想教育にいっそう大きな力を入れなければならない、党の軍指導体系をしっかり固め、全軍を最高司令官の革命思想で一色化し、すべての軍人を革命の第一線で党と領袖を決死擁護する銃爆弾に鍛え上げるのが、人民軍における思想活動の基本的方向であり、目標である、と指摘している。革命軍隊が思想をとらえれば勝利し、手放せば滅亡するというのが、将軍の思想である。

ここで言う思想とは、社会主義思想＝領袖の思想のことである。

先軍政治では、外国の軍隊に見られる非思想化＝非政治化の動きとは逆に、人民軍の指導思想＝チュチェ思想の純潔を守り、ブルジョア的思想毒素や反動的思想潮流の浸透を許さず、全軍チュチェ思想化のスローガンのもと、すべての軍人をチュチェ思想を信念とする思想の強者、信念の強者に鍛え上げるよう思想教育に重点をおき、他方では、軍内党組織の機能と役割を高め、人民軍が朝鮮労働党旗を高くひるがえして党軍としての真価を強く発揮するようはからっている。ここでは、党委員会の集団的指導のもとに、軍指揮官の統一的指揮体系が貫かれるよう部隊指揮管理原則を徹底化し、党の唯一的指導のもとに全軍が一糸乱れずに動く鉄の規律と党風を踏まえた軍風の確立、軍・政の正しい結合の問題など、党指導体系を確立するうえで持ち上がる問題を積極的に解決していった。社会主義偉業は本質上

領袖の思想と指導によって進められる偉業である。このことを熟知している帝国主義者は反社会主義闘争の矛先をなによりも領袖の思想と指導の去勢・抹殺に向けている。

冷戦終結後の今日においてもそうした事情に変わりはなく、帝国主義の反社会主義・反共和国策動の矛先は依然として革命の首脳部に向けられている。このことから、社会主義を守護するためにはなによりも領袖を擁護しなければならないという結論が引き出されるのであり、とりわけ、これは革命軍隊の本格的な核心的課題とならざるをえない。朝鮮人民軍は 1932 年に誕生して以来、一貫して革命の首脳部擁護の旗じるしを高く掲げて戦ってきたし、いまも「偉大な金正日同志を首位とする革命の首脳部を死守しよう!」というスローガンを掲げ、呉仲洽（オ ジュンフプ）第７連隊称号獲得運動」を展開している。これは、金正日将軍さえ健在であれば、帝国主義のいかなる孤立圧殺策動も粉砕し、必ず勝利するという確信の表れである。

金正日将軍は、人民軍の領袖擁護のスローガンについて、つぎのように述べている。

「この度、人民軍が『偉大な金正日同志を首位とする革命の首脳部を死守しよう！』というスローガンをうち出しましたが、このスローガンには、党と永遠に運命をともにしようとする人民軍軍人の崇高な思想･精神世界がそのまま反映されています。わたしは、このスローガンを見て大いに励まされ、朝鮮革命勝利の確信をいちだんと強く固めました」

将軍は、主席と党の指導によって育成された人民軍ならではこのようにりっぱなスローガンを掲げることができない、人民

軍は白頭の密林で最初の銃声を上げて以来、これまでの長い期間、つねに領袖と運命をともにし、革命が試練にさらされるたびに革命的かつ戦闘的なスローガンを高く掲げて、党と領袖を決然と擁護してきた、歴史のきびしい嵐をついて、勝利に勝利を重ねてきた朝鮮革命の誇らしい年代記には、党と領袖を決死防衛した人民軍の忠誠心が熱くこもっている、と指摘した。

呉仲洽第7連隊が、抗日武装闘争の最大の試練とされる「苦難の行軍」をはじめ、つねに戦いの先頭に立って金日成将軍のパルチザン司令部を擁護し、朝鮮革命の運命をりっぱに守ったことはよく知られていることである。呉仲洽第7連隊のこの領袖決死擁護精神は、領袖への絶対的な崇拝心にもとづく高潔な革命精神であり、司令部の安全のためなら、敵陣にもためらいなく躍り込む肉弾精神であり、敵弾を身をもって遮る城塞精神、防弾精神である。

「呉仲洽第7連隊称号獲得運動」は全軍チュチェ思想化の要請に即して、人民軍を革命の首脳部決死擁護精神＝銃爆弾精神にあふれる最高司令官の親衛隊、決死隊に鍛えあげる集団的革新運動である。

1997年9月のある日、金正日将軍は、呉仲洽第7連隊称号獲得の判定を受けている区分隊を訪れた。

兵営のここかしこに力にあふれるスローガンが貼り出され、旗が勢いよく風になびいていた。

静寂な谷間に養魚池が連なり、緑に囲まれた兵営の雰囲気は、将軍を満足させた。そのような外観ばかりでなく、部隊はあらゆる面で全軍の手本となる一当百の精鋭部隊であった。

とくに、将軍が高い評価を与えたのは、軍人の思想・精神状態であった。

金日成主席の現地指導を受けたこの部隊は、現地指導図録パネルをとりつけた現地指導学習室を設けて、軍人の思想教育に力を入れていた。思想教育の効果は、部隊の芸術サークル公演にりっぱに反映されていた。

主席の現地指導精神で貫かれた公演は形式が斬新で、全演目が領袖決死擁護で貫かれ、部隊の特色もりっぱに生かされていた。

演目は、合唱『お会いしたい将軍』『われらの将軍が一番だ』、独唱とパンチャン（傍唱）『わたしが守る祖国』、太鼓と斉唱『正日峰の雷鳴』と続き、詩と歌『われらは誓う』『革命の首脳部決死擁護せん』でクライマックスに達した。

将軍は、軍人たちが公演で、一身をそのまま肉弾と化して革命の首脳部を決死擁護し、最高司令官に従ってチュチェの革命偉業を完成せずにはおかないという不屈の信念と意志、楽観に満ちた軍務生活をりっぱに見せてくれたとたたえ、わたしは今日、部隊を楽しい気持ちで視察した、部隊の全軍人が政治的、思想的に、軍事技術的にしっかり準備されており、指揮官の指揮能力も非常にすぐれている、わたしは、部隊が「呉仲洽第７連隊称号獲得運動」を通じて、党と領袖に限りなく忠実な一当百の戦闘部隊にりっぱに成長したことを喜ばしく思う、諸君の成果を高く評価する、と言った。

そのあと、随行した軍指揮幹部に向かって、これなら判定官が合格のはんこを押してもよくはなかろうかと言って豪快に笑

った。

今日、「呉仲洽第７連隊称号獲得運動」は、人民軍を領袖決死擁護精神にあふれた最高司令官の戦闘部隊に鍛え上げる大衆的運動として活発にくりひろげられており、そのなかで朝鮮人民軍は思想の強軍としての風貌をいかんなく誇示している。

金正日将軍は、李寿福（リスボク）、吉英祚（キルヨンジョ）を英雄の典型として押し立て、かれらの気高い精神を全人民軍将兵が見ならうようはからっている。

典型を創造し、それを一般化するという方法で革命と建設を前進させるのは、金正日将軍の指導方法である。

李寿福、吉英祚の両英雄は革命の首脳部を守って一命を捧げた忠臣である。

李寿福英雄は朝鮮戦争当時、1211 高地の戦いで敵トーチカの銃眼を身をもって塞ぎ、部隊の進撃路を開いた、弱冠 18 歳の肉弾英雄であった。

将軍は軍視察の際、人民軍将兵が李寿福英雄の精神に見ならおうと努めていることを知り、人民軍の全将兵が今日の李寿福になるよう指導したのであった。

一方、「90 年代の李寿福」と言われている吉英祚英雄は、操縦していた飛行機が不慮の事故で火を吹いたとき、ここで飛行機が墜落すれば革命の首脳部に危害が及ぶと判断して、機首を海の方へ向け、愛機と運命をともにした 30 歳の自爆英雄である。

人民軍の視察途上、李寿福、吉英祚両英雄の精神を全軍が見ならうようはからった将軍の意に沿って、李寿福英雄の有名な自作詩がいままた全軍、全国で広く愛誦されるようになった。

また、吉英祚飛行士の英雄的行為をテーマにした劇映画が制作、上映され、亡夫の部隊に入隊していた未亡人は、将軍の接見を受けた。

思想を基本としてとらえる軍指導によって、人民軍兵士は死を恐れぬ勇敢な兵士に育っており、先軍政治によって、今日、人民軍はアメリカ軍部や南朝鮮の高官も認めているように、「自爆精神というもっとも恐ろしい兵器を持つ世界最強の軍隊」としてその威風を誇示している。

無敵必勝の強軍

最近、アメリカと南朝鮮のマス・メディアは、朝鮮人民軍にはアメリカ軍を制圧する力があり、これまで朝鮮半島でバルカン戦争や湾岸戦争のような戦争が起こらなかったのは、アメリカが人民軍の力を恐れていたからだとする資料や論評を競って掲載している。

もし、アメリカ軍が人民軍との対戦で被害を最小限度に食い止める力がないとすれば、人民軍の存在は米軍の戦争挑発を抑止する強大な力として作用していると見てよいであろう。

ところで、人民軍のそのような軍事力は経済的にゆとりのある状況のなかではなく、最悪の状況のもとで培われたのであり、それを可能にしたのが先軍革命指導である。

朝鮮人民が再び帝国主義の植民地的奴隷に転落するのを防ぐため、社会主義を守り、チュチェ革命偉業を完成させるべく、困苦欠乏に堪えながら軍需産業に格別の力を注ぎ、強大な軍事

力を養ったからこそ、朝鮮人民軍はアメリカの横暴を抑えることができたのである。

金正日将軍は、軍事技術的準備が立ち遅れていては敵に勝つことができない、政治的、思想的にしっかり準備できた革命軍隊が、その上で軍事技術的にも十分に準備できていれば、無敵の軍隊になれるとして、軍需産業を優先させる原則で、人民軍の軍事技術的強化をはかっている。

軍隊とは戦争を目的とする集団であり、戦う以上必ず勝たなければ存在意義がない。いかにすぐれた精神力と道徳的品格の持ち主であっても、戦う能力や体力が弱ければ、軍人の本分を果たせるものではない。いわんやハイテク兵器をもっておこなわれる現代の戦いでは、兵士がそれらを自由に使いこなし、鋭い状況判断力と臨機応変の作戦能力、屈強な体力を兼備していなければならない。

兵器と軍人のどちらを優先させるべきかと言うと、それはもちろん軍人の能力である、軍人は軍事力構成の根本的要素であり、革命戦争の主体だとするのが、金正日将軍の軍隊観である。

将軍はそうした観点から、戦争では兵器も重要であるが、それを扱う主人はあくまでも軍人である、軍の威力と戦争の勝敗は兵器ではなく人間によって決定される、軍人が革命思想でしっかり武装し、軍事技術的に十分に準備されていれば、そのような軍隊は必勝不敗であるとする軍人中心のユニークな軍事思想をうち出し、軍の指導ではつねに、兵器よりも軍人を重視し、かれらの思想的覚醒を促して、いっさいの軍事問題を解くことを重要な原則としている。こうして、人民軍兵士はいかなる状

況のもとでも、またいかなる敵軍と戦っても一撃のもとにこれを撃破する、力と知略の持ち主に、どのようなハイテク兵器もりっぱに扱える万能の兵士に、一人が百人、千人を相手どって戦っても負けない「一当百」の精悍な軍人に育っている。

1996 年 3 月のある日、将軍は、最前線にあって「一当百」のスローガンを生んだと言われる大徳(テドク)山の区分隊を訪れた。

「一当百」と大きく刻まれた岩壁の前で立ち止まり、それに見入っていた将軍は、1963 年 2 月 6 日、降り積もる雪を踏んで大徳山陣地を訪れた主席が、人民軍に「一当百」の革命的スローガンを示し、人民軍の強化発展にとって歴史的な意義を持つ綱領的な教示をおこなったとして、.当日のことを感慨深く回想した。

区分隊の指揮官が将軍に、このスローガンが最初に出されたとき、軍内の反党反革命分子は、度がすぎる、外国人に笑われる、一当百、一当百と騒ぐと、有事に際して友邦の援助が期待できなくなる、などと言って、スローガンをなくしてしまおうとしたが、区分隊の将兵は誰かに指図されたわけでもないのに、ノミで岩壁に「一当百」と大きく刻んで、これを兵力強化の旗じるしとし、必勝の信念を固めてきたと報告した。

将軍は、よくやったとほめ、人民軍は「一当百」の革命的スローガンにこもる主席の深い意図を体して軍人の教育に力を入れ、全将兵を一当百の精兵に鍛えようと強調した。

将軍が「一当百」のふるさと大徳山陣地を視察したのは、「一当百」のスローガンを軍事力強化の旗じるしとして、人民軍全将兵を無敵必勝の強者に鍛え上げようという意図からであった。

不屈の革命精神と巧みな戦術、百発百中の射撃術、それにが

っしりした体躯を持ち、自分の兵器は言うまでもなく、分隊、小隊、中隊の兵器、ひいては敵の兵器をも自由に使いこなし、艦船の甲板兵は砲や機関銃、無電まで受け持つ能力を身につけ、砲の装弾兵は照準や砲長の任務もりっぱに勤めることができるよう準備できているのが人民軍将兵である。

1994 年秋のある日のこと。

米国防省情報局長クラッパーが非武装地帯を視察中、パイロットの失策からか、ヘリが非武装地帯中央の休戦ラインに近づいた。南側の兵士(アメリカ兵か南朝鮮兵かは未詳)は、ヘリが逃亡しているものと思って射撃を加えたが、一発も命中しなかった。

このとき、北の人民軍が休戦ラインを越えたヘリに射撃を加えた。銃弾は一発で命中したが、幸いにエンジンと給油タンクが無事だったので墜落することはなかった。九死に一生を得てワシントンに帰ったクラッパーは、北朝鮮とは戦うべきでないと主張したという。

この出来事があってから、アメリカ側は非武装地帯付近におけるヘリの飛行を禁ずる一時的な措置を取った。偶発的な衝突から北朝鮮と戦う羽目に陥っては困ると思ったのであろう。

他方、金正日将軍は人民軍装備の現代化に格別な力をいれ、いかなる近代戦にも対処しうるようはからっている。現在、強力なハイテク兵器の開発に努めているアメリカに対抗して、それに負けない強力な打撃手段を持とうとする国が現れるのは極めて当然なことである。だからといって、分断された小国の北朝鮮が核空母やステルスのようなハイテク兵器を大々的に作っ

ているアメリカと同じ規模でもって軍備競争をすることは考えられない。西側の軍事戦略家は、巨額の費用をかけて空母やイージス艦を作っているアメリカにたいし、ただの一発でそれらを撃沈しうる比較的安価なミサイルをもって戦うのが北朝鮮の戦略だと分析している。

ミサイル攻撃には無防備だと言える平野地帯の大都市をたたけば、強大な破壊力を持ってアメリカの軍事力・国力のピラミッドをたちどころに崩し去るだろうというのである。これは十分にありうることである。NATO 軍司令官クラークが、ユーゴとの戦争で空や海から１か月以上もミサイル攻撃を加えたが、コソボ・セルビア軍の無力化を果たせなかった、セルビア軍はまだまだ強力だ、と告白したように、現代戦で空軍や海軍は無視できない存在ではあるが、そうしたハイテク兵器が戦争の勝敗を決めるのではない。

ともあれ、世界的に軍事科学技術が急速な発達をとげ、新型兵器が続出している状況にてらして、北朝鮮が軍備の現代化戦略をもって人民軍の強化をはかっていることは確かである。

金正日将軍は、北が「苦難の行軍」と強行軍を余儀なくされた苦しい状況のもとでも、最新兵器による人民軍の武装に深い関心を払い、軍視察の際にも、指揮官たちに兵器の世界的発達状況や新兵器の性能について詳しい説明をおこなっている。

こうした先軍革命指導を得て、いま人民軍の装備は高いレベルにあると評されている。

アメリカや日本の研究家は、人民軍の空軍は、アメリカ軍の最新鋭戦闘機と空中戦を交えてもひけをとらず、敵の主要拠点

や軍集団を一挙に壊滅しうる現代的軍用機を保有していると分析している。

海軍も領海をりっぱに守るすぐれた艦船と兵器を備えた大艦隊に急成長し、戦車や砲兵力も高いレベルに達しているという。

北朝鮮の軍部がおこなった声明や談話でも強調されているように、北朝鮮は敵が地球上のどこにあろうとも一撃のもとに殲滅しうる強力な打撃手段を備えており、実際に砲と戦車の機動力は以前に比べて数十、数百倍に高まっている。例えば砲の自走化能力は、それが進んだ国も目を見張るほど高いレベルにある。

装備の現代化と相まって人民軍の作戦能力は非常に高い水準に達している。

先軍指導による作戦能力の高さは、1994 年の空軍飛行隊総出動訓練の状況を見ればよく分かるであろう。

ある日、最高司令官金正日将軍は空軍指揮部に飛行隊の総出動訓練命令を発した。

訓練の開始は数時間後に予定された。その短い時間に一国の軍用機を総出動させるのは、世界のどの国でも例のないことであった。空軍の長い伝統を誇る発達した国でも、自国の全軍用機を一斉に出動させた例はない。最高司令官の命令に驚きながらも、指揮官たちは直ちに訓練開始の準備に着手した。ところが、北朝鮮の空が急に黒雲に覆われはじめ、天気予報ではみぞれが降る地方もあると伝えられた。

しかし、そうした悪条件のもとでも、全国各地の飛行場からは、さまざまな機種の飛行機が一斉に飛び立ち、飛行任務をり

っぱに果たして基地に帰った。将軍は訓練の成果に満足の意を表した。

北朝鮮のこの飛行隊出動訓練に先立って、空の優勢をもって北朝鮮を威嚇しようとはかったある敵対国が、自国軍用機の半ばをもって出動訓練をおこなおうとしたことがあったが、指揮体系の分散性に加えて空模様が悪化し、訓練を放棄するという出来事があった。

金正日将軍は、その国の失敗をあざ笑うかのように、人民軍空軍に飛行隊総出動訓練命令を下して見事に成功させたのである。

先軍革命指導によって、人民軍の陣地も国の実情と現代戦の要請に即して完璧に築かれている。

殺傷・破壊力の甚大な兵器が大量動員される現代戦で、いかなる打撃にもびくともしない堅固な陣地を構築することは、軍の軍事技術的威力を強化するうえで重要な意義を持つ。湾岸戦争のとき、多国籍軍が延べ数千数万の航空機とミサイルをもってイラクの防備施設を攻撃したが、地下構造物のすべてを破壊するまでにはいたらなかった。イラクの防備施設物は砂地を掘って作ったコンクリート構造物であるが、北朝鮮の坑道要塞は、原爆をもってしても破壊できない堅固なものである。

世界の軍事評論家は、北の軍事力を研究すればするほどその威力の大きさを思い知らされるとして、肯定的に評価している。古代マケドニア軍の偉容や現代グルカ兵の勇敢さを好んで引き合いに出す西側のマス・メディアも、「世界でもっとも強力な軍隊、敵がもっとも恐れる軍隊は朝鮮人民軍だ」と特筆大書してい

るのはいわれのないことでない。

金正日将軍は軍需産業の強化にも深い関心を払っている。

軍需産業は自衛的軍事力の基礎であり、軍事力を強力に裏うちする必須の前提である。軍需産業に力を入れず、他国に頼る軍隊はいつかは必ず滅びるのが歴史の教えるところである。

将軍はある日、国がこの難局に際し、目前の苦しみに負けて軍需産業に力を入れなくなれば、社会主義を守ることができないと強調し、ケーキやドロップは作れなくても生きていけるが、兵器と弾薬を作れないと生きていけないと語った。

将軍は、現代戦は弾丸とオイルの戦争だとして、軍需品工場をしばしば現地指導し、隘路を一つひとつ解決していった。

このような先軍指導によって、北の軍需産業は日進月歩し、決心さえすれば、どのような兵器も作れる高いレベルに達した。

それで、1999 年 3 月、アメリカ軍が主導する NATO の空爆で廃墟と化した国ユーゴの一高官が、北の軍事関係者にこう語ったという。

「われわれは今度の戦争を通して、自衛的国防力を強化すべき必要を切実に感じた。周囲の国ぐにが NAT0 に加勢し、あれほど頼みとしていたロシアの支援も得られなかったのがくやしくてならなかった。問題は、一にも二にも自らの軍事力を強化することにある。これだけが生きる道だ。われわれは、困難をきわめた状況のもとでも自衛的国防力の強化に大きな力を入れている金正日将軍の政治がいかに先見の明ある政治であるかをはっきりと知った」

軍視察

金正日将軍は 90 年代後半の 5 年間に 430 余の人民軍各部隊と区分隊を視察しているが、その道のりは 4 万 8,000 余キロにのぼると伝えられている。

世界は、将軍のこのエネルギッシュな軍視察を先軍政治方式の具体化だとして注目している。将軍の軍視察はなによりも、アメリカとの正面対決として受け取られている。

金日成主席が急逝した 1994 年以来、北朝鮮は帝国主義勢力の包囲に対抗し、「苦難の行軍」と強行軍をもって社会主義をゆるぎなく守りぬいた。この時期の将軍の軍視察は、人民軍の強化によってアメリカの軍事的圧力を退け、社会主義を擁護する意図のもとに進められたと考えられる。

将軍は、現在進めている人民軍の現地指導が社会主義の擁護という重大問題とかかわっているとし、この重大問題解決のカギは軍にある、と指摘している。このように金正日将軍の軍視察は、将軍が人民軍の陣頭に立って反帝闘争を進めていることの表れであり、そうした意味で、将軍が占めている位置は、社会主義を守り、チュチェ偉業を前進させる革命の最高司令部だと言える。

将軍はこの最高司令部を最前線に置き、千里を見透かす慧眼と必勝の信念、無類の胆力をもって、優勢を誇る敵との対決でつねに勝利してきた。

他方、将軍の軍視察は人民軍の指導にとどまらず、国の革命

と建設全般を指導するためのものでもある。

なによりも、人民軍の視察に力を入れ、それを通して社会主義偉業全般を偏向なく導いていくのが、将軍の革命指導の根本的特徴である。

北朝鮮の人民は将軍の軍視察を自分たちの部門への現地指導でもあるとして受けとめ、軍視察を通してなされた将軍の一つひとつの教えを胸に刻んで、その実行に取り組んでいる。

このように、将軍の軍視察は人民軍の枠を越えた社会主義建設全般への指導であり、北朝鮮に特有な伝統的「人民行き列車」に乗った「人民行き」の道のりである。

将軍の視察がおこなわれたところでは、将兵の士気がたぐいなく高まり、鉄桶の防御陣が構築されている。

1211 高地、351 高地、五聖山（オソン）、大徳山など陸海空軍の各区分隊、それに軍事学校や軍事対象地も訪れて、作戦能力その他の実態を具体的に確かめ、隘路の解決対策を教えるなど将軍の的確な指導こそ、人民軍の政治的・軍事的威力を最大限に高める要因である。将軍は、人民軍将兵がいるところなら、どこへでも出かけていく。

1998 年のある日、将軍が敵軍と向かい合った第一線高地のある陣地を訪れたときのことである。車が高地の麓に到着したのは早暁４時であった。ここから陣地までの山道は険しかった。車は降りしきるみぞれにぬかるんだ急坂を登っては滑り、また登っては滑った。それが５度、６度とくり返されたとき、将軍が下車して、随員たちに車を押そうと言った。随員が、こんな悪天候ではとても登れそうにないから、晴れた日を選んで出直

してはと勧めたが、兵士がいるところには必ず行くべきだ、天気のよしあしを気にしていたら、いつかれらに会えるのだ、と言って、ズボンが泥にまみれることなど一向気にかけず、真っ先に車を押して陣地に到着したという。

将軍は、第一線部隊を訪れると、敵陣を眺めながら地形地物や部隊の配置状態、敵情などを具体的に確かめ、状況報告も聞いて、作戦地図を指しながら敵情に備えた戦略戦術的方策を教え、軍人の訓練を見、部隊の戦闘力を高める重要任務も与える。

たえざる現地指導によって、将軍は最前線に延びた防御線の地形地物やその他の状況をたなごころを指すように把握している。

1998 年 5 月のある日、第一線を視察中の将軍は険阻なカチ峰のある陣地に立ち寄った。部隊長は将軍に前線の状況を説明しなければと思いながらも、一面濃霧に包まれている早暁のことで、そうすることができなかった。

一行が高地に立ったとき、霧がいくぶん晴れて、雲の合間に峰々がおぼろに姿を現しはじめた。ほっとした部隊長が地形地物の説明をはじめると、将軍は、地図を見れば説明を聞かなくても分かると言って、広げられた地図にしばらく見入った。そのあと、目に映る峰々の名を一つ一つ挙げていくのだった。.

「向こうに見えるのは先祖（ソンジョ）岩で、その前に見えるのが 351 高地と月（ウォル）飛（ビ）山だね」

霧の中におぼろに浮かぶ峰はもとより、全然見えない地形地物まで的確に言いあてる将軍の指摘に、一同はただ舌を巻くばかりだった。かれらは、将軍が以前当地を何度か非公式に視察

したのでは、と思いさえした。

かれらのそんな気持ちを察したのか、将軍は、わたしはめがねを掛けているのでよく見えるのだ、諸君もめがねを掛けたらはっきり見えるだろう、と言って豪快に笑った。

将軍は、軍視察で軍人の思想教育に格別大きな関心を向けている。

1996 年 11 月 24 日、板門店代表部を訪れた将軍は、第一線の将兵は、国を奪われ主権を持てなかったせいで、亡国の民の悲惨な生活を強いられた父母の涙ぐましい過去を二度とくり返すまいという高度の階級的自覚をもって、祖国の関門をゆるぎなく守っている、とかれらをたたえ、全将兵が搾取と抑圧に苦しんだ祖父母や父母の血のにじむ過去を片時も忘れることなく、人民大衆中心のわが社会主義を最後まで守って戦うよう、しっかり準備させることが大切だと強調した。

数年前、日本の一出版物に、朝鮮地図のまわりに猛獣が群がって吠えたける漫画が掲載されたことがある。北朝鮮の圧殺をもくろんで、アメリカを先頭とする帝国主義連合勢力がいまや攻撃態勢に移ったことを風刺したものであった。

アメリカのタカ派は、1994 年 10 月の朝米基本合意文の採択に抗議して、「米朝基本合意文の採択は過度の譲歩、アメリカの威信の失墜」「米朝基本合意文の発表によって問題が解決されるわけではない」「休戦ラインの北側には人民軍兵力の 70～80 パーセントが集中展開している。これは『南進の脅威』が存続していることを意味している」「アメリカはいつでも北朝鮮に武力を使用する覚悟ができている」などと騒ぎ立て、パトリオット・

ミサイルなどの新鋭兵器を南朝鮮に大々的に持ち込み、「チーム・スピリット」を上回る合同軍事演習「イーグル」や戦争演習「花郎（ファラン）」をくりひろげて、情勢を激化させた。朝米基本合意文の採択によって情勢が緩和されたかに見えたのが、またしても 1993 年の緊張が再現されたとして、世界は憂慮した。

このようなとき、金正日将軍は野戦服にひさしの短い毛皮帽という素朴な身なりで前線視察の途についた。

西側のマス・メディアはこれに直ちに反応した。

金正日将軍の帽子はただの帽子ではない、それはトラのような猛獣狩りにかぶる狩猟帽だ、将軍が狩猟帽姿で最前線に現れたのは、北朝鮮をのみこもうと吠えたける帝国主義の猛獣を退治するためだ、北朝鮮では『将軍は名射手、われらは命中弾』という歌が広く歌われているが、その意味は深い。

先軍政治のらっぱ手―朝鮮人民軍功勲合唱団

.歌は人間の生活と切っても切れない関係にある。軍隊も同様で、軍歌のない軍隊というものはどの国にも存在しない。

人びとの心を音楽をもって動かし、苦しみも試練も歌声をもって克服していくよう導く金正日将軍の指導を得て、北朝鮮では音楽が革命の武器として特別な地位を占めるようになった。

将軍は、必勝の信念と革命的楽天主義をもって軍人を精神的に武装させるうえで、文学・芸術とりわけ音楽が重要な作用をするとして、われわれには朝鮮式哲学・朝鮮式音楽哲学がある、音楽は人びとに生の喜びと革命的情熱を抱かせ、かれらを闘争

と偉勲へと呼び起こす革命と建設の有力な武器である、たたかいのなかに歌声があり、歌声の高いところに革命の勝利がある、と強調している。

将軍は、このような音楽政治を貫くうえで、朝鮮人民軍功勲合唱団を先頭奏者の位置に立たせたのであった。

将軍は、革命の先頭にはつねにらっぱ手が立っている、三池淵（サムジヨン）大記念碑の群像の先頭に抗日戦のらっぱ手をクローズ・アップして立たせたのもそのためだ、いま自分がおこなっている先軍革命指導のらっぱ手はほかならぬ功勲合唱団だ、と意味深く語った。

軍隊におけるらっぱ手は、指揮官の命令・指示を伝え、一定のメロディーをもって隊伍を動かし、集団力を発揮させるなどの重要な使命を担っている。

朝鮮人民軍功勲合唱団が先軍政治のらっぱ手だと言うとき、その政治的意味も同じ文脈でとらえるべきであろう。

功勲合唱団が先軍政治のらっぱ手だということは、合唱団が最高司令官のらっぱ手だという意味である。

朝鮮人民軍功勲合唱団の前身は、1947 年に組織された朝鮮人民軍協奏団の音楽舞踊総合公演における男声合唱隊で、早くから金正日将軍のねんごろな指導のもとに貫禄ある芸術集団に成長していた。将軍は、1990 年代の中頃、男声合唱をもって一時間以上単独公演し、しかも他の形式の種目を加えなくても、そのすべての芸術的形象を表現しうる音楽芸術の独特な一ジャンルとしての男声合唱団を組むことを決心した。軍の性格にふさわしい、覇気にあふれる男声合唱団こそ先軍政治のりっぱなら

っぱ手になれると見たのであった。

将軍は、男声合唱の特性を明らかにし、軍人は銃剣を愛し、軍功へのあこがれが強いから、男声合唱のような、集団力にあふれ、感情・情緒的体験を強烈に発散する音楽をもっとも好むとして、功勲合唱団を世界最高の合唱団に押し立てることを決心し、その方途を具体的に教えた。

将軍は有能な歌手や奏者を補充して合唱団の拡大をはかる一方、それに見合った管弦楽の主体的な再編によって伴奏を完成しなければならないとして、その対策を講じた。他方、合唱団の指揮メンバーともたびたび会って、合唱は声量だけで力を示威する芸術ではなく、文字通りのアンサンブル、ハーモニーの芸術だ、声楽家のボリュームがいくら豊かであっても、管弦楽の伴奏が声楽と調和しなかったり、アリアがコーラスや伴奏にそぐわなかったり、また舞台の背景と照明が音楽を造形的に際立たせることができなかったりすれば、合唱はその力を十二分に発揮することができない、また、功勲合唱団は編曲においても、革命軍隊の勇猛と英知、英雄的気象をよく生かし、指揮は人民軍の規律性と組織性がりっぱに具現されるようにすべきであり、演奏形式においても軍人の革命的気質と戦闘精神がみちあふれるようにしなければならない、と懇切に教えた。

こうした将軍のねんごろな指導によって、功勲合唱団は最初の舞台から早くも、100 編の革命歌も通しで歌えるほどの大合唱団として登場したのであった。

将軍は功勲合唱団の力強い歌声で軍人と人民大衆を精神的に武装させ、それによって、全軍、全社会に必勝の意志と闘争意

欲がみなぎるよう導いた。

将軍は、功勲合唱団がチュチェ思想でしっかり武装し、その一つ一つの歌声に先軍政治の思想・意図が十分にこもるよう、細心な指導をおこなった。

将軍は、合唱団が金日成主席の永生をはかる党の偉業(ここにチュチェ革命偉業完成の根本的な裏付けがある)への献身性を胸に秘めて、時代と革命が切実に求める領袖決死擁護思想と赤旗思想、「苦難の行軍」精神にあふれる歌をうたうよう、合唱曲を自ら選曲し、また時代精神が横溢する 200 余編の歌曲を短時日で完成するよう導いた。

このように金正日将軍の思想・意図をもって自らを武装した功勲合唱団は、核兵器をも思想・芸術の力で一挙に制圧しうる有力な隊伍に育った。

将軍は、功勲合唱団の最初の単独舞台である、1995 年 12 月 24 日の最高司令官就任 4 周年慶祝公演以来、かれらの公演をしばしば観覧している。

1997 年 2 月 15 日、平壌の 4 ・ 25 文化会館では、金正日将軍の誕生日を祝う朝鮮人民軍功勲合唱団の公演会が催された。

最初の歌は『金正日将軍の歌』であった。

1　白頭(ペクトウ)につらなる　うるわしい祖国
将軍あおいで　歓呼にどよめく
太陽の偉業継ぐ　人民の指導者
マンセー　マンセー　金正日将軍

2　大地の花々　その愛つたえ
　青き海原　その功うたう
　チュチェの園きずく　幸せの創造者
　マンセー　マンセー　金正日将軍

3　鉄の意志で　社会主義まもり
　われらが祖国を　世にとどろかす
　自主の旗かざす　正義の守護者
　マンセー　マンセー　金正日将軍

功勲合唱団により作詞、作曲された領袖賛歌『金正日将軍の歌』が持つ意義は、祖国の解放直後に生み出された『金日成将軍の歌』のそれに匹敵する。

『金正日将軍の歌』は人民軍将兵の革命軍歌として力強く響き渡って、全人民が合唱する一心団結の大コーラス曲となり、社会主義の擁護とチュチェ偉業完成の旗じるしになった。朝鮮人民軍功勲合唱団は将軍の思想・意図を奉じて、90 年代の『赤旗歌』とされる『高く立て赤旗』を形象し、金日成主席の急逝で血涙にむせび、深い悲しみにとざされていた全軍、全人民を力づけて主席の永生偉業遂行へと呼び起こした。

白頭の聖なる　赤旗に
主席の生が　映えている
高く立て赤旗　誓いに燃えよ

将軍を守り　ひるがえそう

歴史の峻嶺　踏み越えて
勝利のみ旗に　刻みきた
高く立て赤旗　信念の旗を
将軍に従い　ひるがえそう

金正日将軍は、功勲合唱団によってはじめて歌われたこの歌のなかで「白頭の聖なる赤旗に主席の生が映えている」と「勝利のみ旗に刻みきた」という歌詞が一番気に入るとし、歌謡『高く立て赤旗』は90年代の『赤旗歌』だと高く評価した。

軍人と人民はこの歌をうたいながら主席と永別した悲しみから立ち直り、「苦難の行軍」と強行軍を勝ち抜いたのであった。

1996年の建軍節に際して訪れた前線西部軍部隊指揮部と、翌年の戦勝節を迎えて訪れた第一線の人民軍部隊など、功勲合唱団を先立たせて将軍が訪れた人民軍区分隊や第一線の各高地では、功勲合唱団の力強い歌声が高らかに響き渡った。

アメリカが北朝鮮を威嚇し、いままさに戦争を起こそうとしていたある年のこと、人民軍将兵は最高司令官金正日将軍の戦闘命令の下るのを待って、万端の動員態勢を整えていた。そうしたある日、将軍は人民軍の指揮メンバーに向かって、すばらしいものを人民軍各部隊に贈ることにしたと言った。時が時だけに、かれらは将軍が強力な新型兵器を前線に配備するのではと考えた。

ところが、将軍が贈ると言ったのは、意外にも、歌謡『千万

が銃砲弾になろう』の楽譜だった。楽譜を手にした指揮メンバーは、すばらしいものを贈ると言った将軍の意図の深さにいまさらのように感嘆した。かれらは、凶悪な敵との対決で勝利する秘訣がすぐれた武器や兵力数にでなく、人民軍将兵の思想・精神力を強く呼び起こす歌声にあるとし、歌声をもって敵軍の制圧をはかる最高司令官の崇高な志を胸に深く刻んだ。

金正日将軍は功勲合唱団を先立たせて軍視察を続け、革命的気概にあふれる勇ましくも荘厳な軍歌をもって先軍政治をりっぱに指導している。

軍民一致

朝鮮人民軍は古今東西のどの軍隊も果たせなかった思想・精神力および実践活動におけるもっとも強固な軍民一致を実現し、無敵強兵の地歩をいちだんと固めた。

金正日将軍は、革命的軍人精神にもとづく軍と人民の思想および闘争気風の一致こそ軍民一致思想の本質であり、国家社会の基盤である、と指摘している。

北朝鮮における軍民一致は、先軍政治の推進力であり、帝国主義連合勢力との対決で勝利し、チュチェ偉業を完成させるための有力な武器である。

今日の軍民一致は従来北朝鮮で強調された軍民一致をうけ継いだものであるが、そこには性格上一定の相違がある。

今日における軍民一致は、軍が人民を助け、人民が軍を擁護するたんなる相互補完的な団結の域を越えて、革命の主力＝柱

である人民軍の高度の内面世界と闘争気風を人民が学び取り、軍と人民が思想的にも、闘争精神と気風、方法のうえでも完全に一致する高度の団結である。

金正日将軍は、社会主義と人民の命運が尽きるか否かの岐路に立たされた 90 年代の複雑至難な状況のなかで、人民軍将兵が発揮した思想・精神力と革命的闘争気風を革命的軍人精神として高く評し、それを軍民一致の精神的および実践的基礎となるようはからった。祖国が最大の試練にさらされていた時期に、将軍が人民軍に寄せたこの信頼は、軍人の精神力を百倍、千倍に高めた。

1996 年 9 月に第 1 段階工事を完了した安辺（アンビョン）青年発電所は、軍人のそのような精神力の精華であった。

安辺青年発電所の建設は、江原道一帯の電力不足を解消するために進められたものであるが、西側観測筋の推算で総工費 40 億ドル強と目された西海閘門のそれに倍する、世界屈指の大自然改造工事であった。しかもそれは、「苦難の行軍」というきびしい状況のもとで進めなければならなかったのである。

金正日将軍はこの至難の課題を人民軍が担当して遂行するよう命じた。

軍人建設者はすべてが不足していた 90 年代のあの苦しい状況のもとでも、工事全期間にわたる将軍の深い信頼と配慮に励まされて果敢な戦闘を展開し、不可能を可能に変えながらついに工事を完成したのであった。

金正日将軍は第 1 段階工事の完工を目前にした 6 月 10 日、建設現場を訪れて、天井岩から水がしたたり落ちる大型水路まで

視察し、軍人建設者の英雄的なたたかいぶりについての報告を聞いた。

それから数か月たった 9 月中旬、再び現地を訪れた将軍は、安辺青年発電所は党の要求とあらば山をも移し、海をも埋める革命的軍人精神の貴い結実だ、軍人建設者が発揮した大衆的英雄主義と気高い犠牲精神、祖国と人民の前に積んだ偉勲を祖国は永遠に忘れないであろう、人民軍将兵が発揮した革命的軍人精神はいかなる状況のもとでも、党から授かった戦闘的課題をりっぱに遂行する絶対性、無条件性の精神であり、いかに困難な任務も自力でやりとげる自力更生、刻苦奮闘の精神であり、党と革命、祖国と人民のためなら生命をもなげうって戦う自己犠牲精神、英雄的闘争精神であるとたたえた。

こうした決死貫徹の闘争気風と領袖擁護精神、革命的軍人気質はたちまち全軍にゆきわたって朝鮮人民軍の革命的軍人精神＝革命的軍風として定着し、それが社会にも波及して、全人民を「苦難の行軍」、社会主義強行軍へと、さらには強盛大国建設の突破口を開く第２のチョンリマ大進軍へと奮い起こす原動力となったのである。

金正日将軍は、抗日革命闘争時代に抗日遊撃隊と人民の間で開花した「擁軍愛民」の革命伝統を、発展する革命の要請に即して新たな段階に引き上げ、軍民の血縁的結びつきをいつにもまして強く固めるようはからった。

人民軍によって生み出された革命的軍人精神が全国に浸透していくなかで、軍隊は人民に尽くし、人民は軍隊を擁護するなど軍民間の情誼は日を追って厚くなっていった。

農場で失くした牛を見つけ、何里もの道を引いて行って持ち主に返した一軍人の美談、思いがけない火災で一家が焼け出され、途方に暮れていた住民を真っ先に助けて、以前にもましてりっぱな住居を建ててやり、大小の所帯道具まで揃えて贈ったある部隊の美挙など、心温まる話は尽きない。

金正日将軍は、1996 年 12 月のある日、黄海(フアンヘ)北道銀波(ウンパ)郡養洞(ヤンドン)里の農民から１通の手紙を受け取った。

「(略)

将軍

私達が２～３か月分の食糧を割き、それを軍糧米として納めたからといって生活に困るようなことはありません。食糧を節約し、ムギを前作し、野菜もたくさん植えて不足分を補えば、おなかを空かさなくても十分に持ちこたえ、来年の農事を営むことができます。祖国解放直後に金済元(キムジェウオン)農民が偉大な主席を仰いで愛国米を献納したように、いまは私たちが偉大な将軍を仰いで、より多くの軍糧米を納めようと思います(略)」

銃後の自分たちは腹を空かしても構わないが、祖国の守りを固める軍人にひもじい思いをさせてはならないという、この涙ぐましくも美しい軍支援気風は、軍隊のためならなにを惜しもうという全国人民の真心の表れである。

将軍は軍の指揮メンバーに、この手紙の内容をもって軍人を教育するよう指示し、諸君も読んで感じたろうが、この１通の手紙にもわれわれの社会主義を守り、党と永遠に運命をともにしようとする朝鮮人民の鉄石の信念と意志がりっぱに反映されている、わたしは手紙を読んで大いに力づけられた、手紙の内

容を全国の農場員に伝えたところ、反響がすばらしかった、農業勤労者はいま、養洞協同農場第７作業班員の手本にならって、軍糧米をとどこおりなく納め、営農準備もりっぱにおこなおうと誓い合い、われもわれもと軍の支援に奮い立っている、この手紙は人民を教育するうえで極めて大きな意義がある、と語った。将軍は、このような軍民関係をよりよく発展させるうえで、軍が舵を取り、主導的役割を果たすようはからった。

軍民一致の威力は、もっともきびしい試練の時期に全人民の団結した力で帝国主義の侵略策動を粉砕して社会主義を守り、「苦難の行軍」と社会主義強行軍を勝ち抜き、強盛大国建設の突破口を開くたたかいで遺憾なく発揮された。

2　強盛大国建設の先頭に立って

祖国の防衛も社会主義建設も軍が担当して

北朝鮮は 1994 年以降数年にわたって、建国以来最大の試練とされる、物質生活分野での「苦難の行軍」を余儀なくされたが、1998 年からはそれが最後の勝利に向けた社会主義強行軍へと移行し、さらにその翌年には、強盛大国建設の突破口を開く第２のチョンリマ大進軍が開始されたのであった。

ところで、「苦難の行軍」と社会主義強行軍の時期に、チュチェの革命偉業を挫折させることなく、ひきつづき勝利に向けて前進させるためには、経済建設分野で主要攻略目標を正確に立て、これに全力を集中しなければならなかった。

ここで第一の攻略対象とされたのは、農業部門とエネルギー分野であった。

経済事情の悪化は食糧問題の解決を焦眉の急として浮上させ、また、操業不振にあえぐ諸企業を立て直して生産を活性化させるためには、産業の血管といえるエネルギー分野から先に盛り立てなければならなかったのである。

将軍は、この主要目標の攻略に革命の主力、人民軍を投入した。「革命の主力」という位置づけは、もっとも困難な時期に革命の基本戦線を受け持って危機の克服に当たり、いかに膨大な任務もいささかの偏向もなしにりっぱに遂行することを軍隊に

求める先軍政治の根本的原理を踏まえたものであった。

将軍が 1997 年度の営農を人民軍の全的な支援によって進めるようはからったのは、その端的な表れである。

抗日武装闘争時代の「苦難の行軍」で最大の隘路が食糧不足であったように、90 年代の「苦難の行軍」でも、食糧不足が最大の難点であった。食糧不足を解消しないでは、国の全般的難局を打開することができなかったのである。

西側諸国は、北朝鮮の食糧難に乗じて社会主義を崩壊させようとし、コメをカードにありとあらゆる卑劣な術策を弄した。

帝国主義とのたたかいで社会主義の原則を守り、強硬高圧の姿勢を貫くうえに、たとえわずかであっても、食糧問題でブレーキがかかるようなことがあってはならなかった。

将軍は 97 年度の営農を人民軍に任せるにあたって、今年の営農をりっぱにおこなうのは、人民の食糧事情の解消という単純な経済実務的問題でなく、敵の反共和国·反社会主義策動を粉砕し、人民大衆中心のわが社会主義を守り通すための深刻な政治闘争である、本年度のわれわれの基本的な課題は、一にも二にも三にも農事をりっぱにおこなうことだと強調した。

将軍は機会あるごとに、軍の指揮メンバーに向かって、今年は全党、全軍、全人民が総動員し、なんとしても営農をりっぱにおこなって、食糧不足を決定的に解消し、「苦難の行軍」を勝利のうちに締めくくらなければならない、人民軍は本年度の農村支援に積極的な姿勢をもって大々的に取り組もう、人民軍は農村支援を綿密に手配して、一人でも多く動員するよう努めるべきだ、今年は、人民軍指揮メンバーの党への忠実性と責任感

の強さが、農村支援活動で集中的に表現されなければならない、と大きな信頼と期待を表明した。

農村支援に向かった人民軍将兵はまず、農機具の修理や肥料の生産など、営農準備に万全を期した。田植えが始まると、昼夜兼行の戦闘をくりひろげてこれを適時にやりとげ、引き続く草取りでも例年にない成績をおさめた。

ところが、人民軍将兵の努力によって黄金の穂が波うちはじめた初秋のある日、一部海岸地帯が空前の暴風津波に襲われた。農地が海水に浸され、農作物は甚大な被害をこうむった。しかし、人民軍将兵は意気消沈することなく、大々的な救援･復旧活動をくりひろげた。かれらは腰までつかる泥沼の中で石や土嚢をかつぎ込んで積み上げ、それが崩れると身体をもって海水の浸入を防ぐなど、日没後も手探りで作業を続けて堤防を復旧したのであった。

農村支援で見せた人民軍将兵のたたかいぶりがいかに犠牲的なものであったかは、秋のとり入れを終えた農民が、「これは穀物でなく、軍人の血と汗であり、魂だ」と言ったことからもうかがい知ることができよう。

田植えが本格化した 5 月のある日のこと、将軍は軍視察の途上、野良の速報板に貼られてあった 1 枚の速報を手にした。田植え現場を見回った随員が、軍人の思想・精神状態に深い関心を寄せる将軍に見せようとして、はがしてきたものであった。

そこには「われわれがみな引き受けよう」という表題の下に、闊達な筆致で「祖国の防衛も社会主義建設も農業戦線もわれわれがみな引き受けて、『苦難の行軍』の栄誉ある勝者になろう!」と

書かれ、その背景にハンマーと鎌と銃と剣が描かれてあった。

農場で戦闘をくりひろげる人民軍将兵の精神力と息吹が強く感じられるその速報に見入っていた将軍は、この１枚の速報からも人民軍将兵が農業を心をこめて支援していることが分かる、政治活動はこのようにすべきだ、人民軍は何事もみなりっぱにやっている、といってほほえんだ。

人民軍が先頭に立ち、全国が力を合わせて田植えを完了した直後の 1997 年 6 月 6 日、全国の農業勤労者と支援者に感謝を送る最高司令官の電信命令が発せられた。

将軍はここで、祖国の防衛も農業戦線もみなわれわれが引き受けようとの忠誠の一念をもって社会主義協同農場に駆けつけた人民軍将兵が、昼も夜も野良ですごし、苗やトウモロコシ栄養ポットの１株を植えても、黄金の穂が波打つ豊年の秋を描きみながら、農作業を戦闘的にくりひろげて革命軍隊の本分を全うしたとして、田植え戦闘の勝利に大きく寄与した全国の農業勤労者と人民軍将兵および農村支援者に感謝を表し、田植えを適時に終えた勝者の意気込みをいささかも崩すことなく、除草をはじめ営農工程別肥培管理を着実におこなって大豊年を迎えるよう指示した。人民軍将兵は、将軍の信頼と期待にこたえて、「最高司令官同志の命令を貫徹する前には野良を離れるな!」というスローガンを掲げ、穀物増産の突破口を開いていった。

人民軍は農業戦線だけでなく、経済の全般的活性化をはかるうえでも、革命の主力としての役割をりっぱに果たした。

経済の活性化には二通りの選択肢が考えられる。一.つは自立的な方法であり、いま一つは外資導入に頼る方法である。

自立の方法はすべてが不足している困難な状況のもとでは「苦難の行軍」の継続を、外資導入は帝国主義への屈従を意味した。

「外資導入は亡国の道であり、自立だけが生きる道だ!」―これは 90 年代後半の錯綜した国際情勢のもとで、北朝鮮が掲げた経済活性化のスローガンであった。,

だが、自力に頼って経済の活性化をはかるのは、言うほど易しいことではない。

ここでは石炭、電力、鉄道など主要基幹工業分野をまず立ち上がらせることが先決条件であるが、それにしてもすべてが不足している状況のもとで、困難は一通りや二通りでなかったのである。

将軍は難関突破の重任を人民軍に託した。

人民軍将兵はあの困難な時期に、9･9 節通り、4･25 旅館などの大型建築工事を担当遂行し、大々的な国土管理事業でも先頭に立って働いた。

このように、祖国の防衛も社会主義の建設もみな引き受けて実行するのが、革命の主力＝朝鮮人民軍のたくましい姿である。

北朝鮮は、「苦難の行軍」、強行軍の時期と同様、今後も人民軍を先立たせて強盛大国の建設を進めていくものと思われるが、この戦略は疑いなく成功し、革命の主力としての人民軍の地位はいよいよ強く固まっていくであろう。

革命的軍風が生み出したもの

時代を知るには、その時代の文物を考察することが一つの原

則とされている。

90年代の後半、人民軍によって生み出された北朝鮮の物質的･文化的財宝には当時の先軍政治の具体的な様相が反映されている。

あの「苦難の行軍」の時代に各地の名勝を人民のリゾートとして壮大に開発し、職場を宮殿のように改装し、工場や住宅の建設でも設計･施工を最高の水準でおこなうということは、未来への確信なしにできることではない。

人間は苦境に陥ったとき、それにどう対応するかによって大きく三つのタイプに分けることができる。

その第一は苦しみに負けて志を放棄するタイプであって、人間として最低の部類に属し、第二には目前の困難にあくせくするばかりで、明日の生活を設計できないタイプで、これは中間の部類に属する。第三は苦難に遭遇しても、信念を失うことなく明るい未来を展望しながら楽天的に生きるタイプで、最高の部類に属する。

人民軍があの苦難の時期に祖国の山河をより麗しく、住みよい人民の楽園に築き上げ、遠い孫子の代まで伝える貴重な物質的財富を数多く創造してきたことは前にも触れたが、これはかれらが祖国と人民を心から愛し、革命が必ず勝利するという必勝の信念を抱いているからである。

朝鮮の5大名山の一つ九月山は、古来「黄海金剛」とうたわれるほどの名勝であるが、それはどこまでも自然の姿そのままの美しさにすぎなかった。

ところが金日成主席は、晩年に、九月山を人民の幸せが花咲

く人民の山、人民のリゾートとして開発しよう、九月山は平壌から遠くない、だから平壌市民が週末を利用して西海閘門―九月山のコースを取って憩いのひとときをすごせるようになったらどんなに喜ぶことだろうか、いまはまだ登山路がないが、山をりっぱに整備して人民の遊園地に作り変えるべきだ、と言ったという。

ところが、主席の急逝後、国が「苦難の行軍」を余儀なくされたため、九月山の開発は先に延ばされ、主席の遺訓も人びとの記憶からしだいに薄れていった。

こうしたとき、金正日将軍は主席の遺訓を忘れることなく、九月山を人民のリゾートとしてりっぱに開発することを決心し、人民軍部隊にその任務を与えた。

こうして、あの「苦難の行軍」のなかで、人民軍将兵は「未来のために」というスローガンを高く掲げて、九月山の開発に取り組んだのであった。

1996 年 10 月のある日、将軍はまだ整理の終わっていない登山コースを取って、九月山の開発現場を視察した。途中、将軍は周辺の樹木を一本も切り倒さずに登山路を開いたのはりっぱなことだ、これは九月山を愛するわが人民軍将兵ならではの美しい行為だ、祖国の一木一草にも愛情を注ぐ軍人の手で登山路が建設されたことを考えると、九月山の景色がいちだんと美しく見える、わたしは党と領袖、祖国と人民に限りなく忠実な諸君を大きな誇りとしている、人民軍将兵こそ、世界にまたとないりっぱな軍人だ、と言ってかれらの功労をたたえた。

1997 年 9 月 23 日、再び九月山を訪れた将軍は、開発現場の

視察中、ある滝の前で歩みを止め、擁壁に刻まれた小さな文字に目を止めた。そこには「未来のために、苦難の最後の年 1997」と刻まれてあった。人民軍建設者が記念に記したものである。

しばらくその文字に見入っていた将軍は、この２段瀑布に「未来のために、苦難の最後の年 1997」と書かれてあるのを見ると、大いに力が湧く、「未来のために、苦難の最後の年」—この文字には明日のための今日を生きる兵士たちの真の人生観と革命的楽天主義が息づいている、明るい未来に向け革命的楽天主義と戦闘的気迫にみちて前進するわが兵士たちの前途を阻む力はこの世にない、と力をこめて言った。

人民軍建設者は、100 余キロの道路工事と 274 か所の構造物工事、30 余キロの安全沿石工事、13 万余立方メートルの擁壁築造工事、27 の楼閣および俯瞰台建設工事、227 の各種標識物および彫刻物設置工事、51 か所の名所建設工事、遊園地地区内工事など膨大な工事を短時日でやり終え、最高司令官の命令をりっぱに遂行したのであった。

将軍は、祖国と人民への献身的奉仕精神を高く発揮し、百年の大計をもって九月山遊園地を建設した軍人建設者の功績を高く評価し、人民が九月山を心ゆくまで探勝できるよう施設を手落ちなく整えること、登山コースをハイカーの体力増進に役立つよう設定すること、大勢の人がにぎわう山の環境を汚さないよう管理に力を入れて、九月山の美しさが損なわれないようにすること、それに九月山の貝葉寺や月精寺、九月山城址などの遺跡を大事に管理し、それを通して社会主義的愛国主義教育を強化し、多様な形式と方法で九月山をはじめ全国の名山を広く

紹介、宣伝することなど、リゾートの開発と管理運営について懇切な指導をおこなった。

人民の九月山はいま、人民の幸せな社会主義生活をより美しくいろどって名山中の名山としての威容を誇っている。

「苦難の行軍」の時期にこのようにして建設された名勝には、九月山のほかにも咸鏡(ハムギョン)北道の七宝(チルボ)山、平安北道の竜門(リョンムン)大窟(鍾乳洞)、黄海北道の正方山などがある。

人民軍の軍風が生み出したものにはまた、多くの中小発電所や養魚場、基礎食品工場などがある。

1996 年 10 月、人民軍の一区分隊を訪れた将軍は、部隊が建設した月飛山発電所を視察した。これは、国の経済事情の悪化で生じた電力不足を自力で打開するため、区分隊の軍人が決起して建設した水力発電所で、それによって各部隊の暖房、炊飯、浴場運営を全的に保障していたのであった。

将軍は、かれらの革命的軍人精神と闘争気風を高く評価し、その手本を全国が見習うよう配慮した。

「苦難の行軍」の時期、北朝鮮の電力事情は格別に苦しかった。ところが、人びとは電力を自力で解決しようとは思ってもみなかった。そのようなとき、人民軍部隊が中小発電所を建設し、自力で電力不足を解消したことを知り、これに力を得た全国の人民は自力更生の革命精神をもって中小発電所の建設に取り組みはじめた。

何事であれ、決心さえすればできないことはなかった。かれらはわずかでも川に落差があるところでは、それを利用し、そうできないところでは水車式の発電所を建設した。発電所建設

ブームは、やがて養魚場の建設ブームへと移っていった。

1997 年、ある人民軍区分隊を視察した将軍は、かれらが養魚池を作って、年中、鮮魚を軍人の食卓に乗せていることを知って、いたく満足し、人民軍各部隊をはじめ、全国各地で養魚場を大々的に建設して養魚を発展させようと言った。

養魚場は、普通の建物や発電所を建設する場合とは違って、付帯条件が多く、とりわけ養魚を科学的におこなわないと所期の効果をあげることができない。まず水源がなければならず、つぎにその水温に適した魚を飼わなければならない。流れる水を引き入れて段々式に養魚池を作る場合は、一般に上段と下段の池の水温が異なり、また同一の池でも上層と下層の水温が異なるため、それに見合った魚種を選ばなければならないという事情もある。ほかにも、優良な餌や種魚を確保すべき問題など考慮すべき問題は少なくない。

将軍は、軍部隊をはじめ全国各地に建設された養魚場をしばしば視察し、具体的な指導をおこなっている。

北朝鮮の各地に建設された基礎食品工場や各種牧場も人民軍の軍風を手本として建設されている。

1998 年 5 月のある日、将軍は、軍人建設者が広梁(クアンリャン)湾の岸辺に新設した現代的な食塩精製工場を視察した。

将軍は清潔な工場内で雪のように白い塩が大量に生産されている光景を見て、各種の栄養分を含み、味も申し分ない上質の塩を軍人たちに供給する食塩精製工場をりっぱに建設したとして、軍人建設者の労をねぎらい、ここで生産される塩を軍隊だ

けでなく、人民にも供給し、さらにすべての臨海道で食塩精製工場を建設するよう指示した。

この時以来、北朝鮮では、多くの基礎食品工場が新設ないし拡充されるようになった。

例えば、1999 年 10 月 28 日、将軍が現地指導した「厳乙勇(オムウルヨン)支配人が経営する食品工場」を挙げることができる。

この工場は元来こぢんまりした食品工場であったが、人民軍の革命的軍人精神と闘争気風にならって、工場を従業員自身の力で拡充したのであった。

除隊軍人を中心に、かれらは自力更生の革命精神をもって、ないものは作り出し、足りないものは探し出しながら、地面がかちかちに凍った酷寒のなかで根切りを掘り、コンクリート基礎工事をおこなうなどの建設を推し進めて、以前に数倍する生産能力の現代的工場を立ち上がらせたのであった。ここではいま、食生活に欠かせない醤油、味噌、化学調味料などの基礎食品を大量に生産している。人民の食生活改善をはかって建てられた軍風の産物は、このほかにも、松岩明基(ソンアムミョンギ)ウシ牧場、現代的養鶏場、ダチョウ牧場、ナマズ養殖工場など枚挙にいとまがない。

このように、北朝鮮にみなぎる革命的軍風は、「苦難の行軍」をたんなる難関克服にとどまらせることなく、試練と真っ向から対決して、明日の勝利に向けた攻撃型の行軍とならせ、ひきつづき楽園行きの行軍に移行するようにした原動力であった。

3　帝国主義との対決を勝利に導いて

思想、政治、外交における勝利

世界が社会主義理論に終止符が打たれたかのように騒いでいた 1994 年 11 月、金正日将軍は『社会主義は科学である』を発表した。

これは、ソ連と東欧社会主義諸国を崩壊させた要因の一つとされる先行社会主義理論の歴史的限界性を明らかにしたうえで、チュチェ思想の原理にもとづく社会主義理論を展開し、社会主義の科学性と真理性、正当性と優越性を新たに解明した文献である。

これについて、共産党連盟―ソ連共産党評議会シェーニン委員長は著書『社会主義の光明は朝鮮から』でつぎのように述べている。

「多くの国が社会主義の理念を捨てた今日、朝鮮人民はあまりにも苛酷な環境のもとで社会主義を建設している。

数十年間続いたアメリカの軍事的威嚇と挑発、経済封鎖、恒常的な戦争の脅威、そのうえ全社会主義国に加えられていた圧力と謀略まで肩代わりして受けながら社会主義を建設しているのである。

そうした困難のなかでも経済を発展させ、アメリカを威圧する国防力を備えた朝鮮人民の絶大な力は、チュチェ思想に根ざ

す自力更生の力であり、かれらが堅持している路線は、チュチェ思想にもとづく世界最初の社会主義建設理論＝三大革命路線である。

人民大衆のものとなったこの朝鮮労働党の思想と路線こそ、そのように巨大な物質的力となったのである。

地球上のいかなる人民も堪えられないほどの圧力―強大な経済力と軍事力に依拠していた大国さえ堪えきれなかったその圧力と懐柔、謀略を朝鮮労働党と人民は、思想の力ではねのけながら前進している」

それでは、1990 年代後半、いよいよ激しくなる帝国主義連合勢力との思想的対決のなかで、北朝鮮の人民は社会主義思想をどのように守り抜いたのであろうか。

帝国主義者との思想的対決で、社会主義思想を守り通すためには、いかなる資本主義の思想毒素にも侵されない思想の強者＝前衛闘士の集団がなければならない。

思想的陣地は、帝国主義者の反社会主義攻勢が思想分野にとどまらず、軍事分野、政治･外交分野など全分野にわたって立体的におこなわれている状況のもとで、それらすべてに対応しうるものとならなければならない。

先軍政治はそうした思想的陣地を人民軍に求めたのであった。

外交とは、口と口、頭脳と頭脳の対決であると言われ、歴史には、純粋に口舌や頭脳の力で戦いに勝利したり、外交で相手を屈服させるといった例が多い。しかし、民族の運命を決する重大問題では、つねに軍事的ないし経済的な力を背景にしてこそ外交の成功を期することができるのである。

先軍政治の不敗性は、90 年代後半における朝米政治外交の争点となった「地下核施設疑惑」問題と弾道ミサイル発射問題で明確になった。

1994 年 10 月、ジュネーブ朝米会談で、クリントン大統領の担保書簡を基礎にして朝米基本合意書が採択されたとき、アメリカ国内のタカ派は、合意書の廃棄を主張した。

国会多数派の共和党は、朝米基本合意書が採択されるや、朝米合意書は間違った選択である、「クリントン政権は譲歩しすぎた」「ホワイトハウスが米朝合意と関連して共和党と事前に十分協議しなかった」などと言いがかりをつけ、合意の再検討を迫った。こうして翌年 1 月、上院外交委員会をはじめ国会のすべての委員会で基本合意書に対する聴聞会が開かれ、「問題点」が追及された。

上院外交委員長は、朝米基本合意書を「一つの報酬」だと非難し、共和党院内総務は、「アメリカが譲歩しすぎた」と政府を攻撃した。共和党の主だった議員も、クリントン大統領が「北朝鮮の核計画」を阻止するための交渉であまりにも多くの譲歩をしたと非難し、「われわれは合意書履行資金の提供に反対し」「合意を覆すために努力するであろう」と公言してはばからなかった。

共和党は、「米朝ジュネーブ合意の破棄、軽水炉建設の支援阻止、これが共和党の立場だ」として、1996 年 11 月初の大統領選挙戦でも、米朝基本合意書をアメリカ外交の主要治績だとする民主党にたいし、それこそ大きな外交恥辱だと食ってかかり、非難合戦をくりひろげた。そうしたなかでタカ派は、朝米合意を葬り、クリントン政府を窮地に追いこむため、金倉(クムチャン)里「地下

核施設疑惑」カードを持ち出した。

アメリカで以前からくすぶっていた核疑惑説が再燃したのは、1998年8月17日付け『ニューヨーク・タイムズ』が、ある情報を引用して「北朝鮮が秘密裏に建設している地下施設は核兵器再開発用のものと認められる」と報じたことからであった。

同年11月22日付け『ワシントン・ポスト』は、「ジュネーブ核凍結合意を喜ばない議会と国防省、情報機関内の批判勢力は、最近の地下核施設疑惑を米朝基本合意をぶち壊し、対平壌対決政策へと進む好機と見ている」と報じた。

ここで民主党はタカ派に屈し、地下核施設疑惑のレールを走る共和党の列車に同乗した。アメリカ政府は、対北朝鮮政策の見直しをおこない、「核疑惑」が解消されないかぎり、基本合意書の「保留も辞さない」という方針を取った。

国防長官は同年11月1日、『朝日新聞』記者とのインタビューで、「北朝鮮が地下施設の査察を受諾しなければ、米朝合意は崩壊の危機に直面するであろう」と公言し、国務省のスポークスマンは11月9日の記者会見で、「北朝鮮で地下施設の査察が実現されなければ、米朝核協定の存立自体が問題視される」だろうと威嚇した。

北朝鮮が地下施設の「査察」をあくまでも拒否する場合、「断固たる対応」を取るのにアメリカは長い時間をかけないであろうという「警告」が当局筋やタカ派のなかからあいついで発せられると、北朝鮮はこれに断固として対応した。

「地下核施設」の査察強要は、共和国の自主権と国の安全を乱暴に踏みにじる行為であって、絶対に許せない、疑惑なるもの

をどうしても解明したければ、卑劣な中傷と冒涜によってわが共和国のイメージを傷つけたことにたいし、当然政治的および経済的補償をおこなうべきである、と。これは禍を転じて福となすあざやかな戦略であった。

アメリカは北朝鮮の要求で会談場に現れ、重なる会談の末、北朝鮮の要求を容れて「見学料」を支払うことを約束し、見学文書にサインした。

こうして、アメリカの専門調査チームは 1999 年 5 月、高い「見学料」を払って金倉里地下施設を空しく見て回ったのであった。

世界のマス･メディアは、アメリカが北朝鮮が最初に付けた 3 億ドルをはるかに上回る 5 億ドル相当のコメを金倉里地下構造物見学料として支払ったとし、アメリカ外交の低能ぶりをあざ笑った。

朝米外交戦におけるアメリカの失態は、南朝鮮の言論界でも大きく取り沙汰された。

『マル』1999 年 8 月号は、うんざりするほど長い対決の末、アメリカが点を取ったのは、がら空きの金倉里洞窟に食糧をぎっしりと詰めてやったことだとし、北が「疑惑」を生み出せば、アメリカ側は食糧支援の方法を模索する、と辛辣に揶揄した。

金倉里「地下核施設疑惑」が空中分解すると、アメリカのタカ派は北朝鮮の「ミサイル脅威」論に飛びついた。

これは、北朝鮮のミサイルがアメリカ本土を狙っているというもので、1998 年初めの国防省年例戦略報告書でも、アメリカ本土を打撃しうる「唯一の弾道ミサイル開発国」として北朝鮮が名指しされている。

「ミサイル脅威」論は、同年8月31日の、北朝鮮の人工衛星発射によって急浮上した。

.アメリカのタカ派は、衛星「光明星一号」を弾道ミサイルだと強弁し、それがすぐにもアメリカ本土に撃ちこまれるかのように騒ぎ立てた。

共和党の指導者は、1998年8月31日、「北朝鮮が弾道ミサイルを発射」したとし、「アメリカ本土を打撃する恐れがある」「危険このうえない」と騒ぎ、「強力な国際的指導力」の行使を政府に迫った。

国防省でも「北朝鮮が弾道ミサイルを発射」したとし、「アジアの安全保障を揺るがす深刻な出来事」という認識のもとに、「北朝鮮の意図とミサイル開発能力の分析」を急いだ。

.平壌がアメリカの巡航ミサイル攻撃を受けるかも知れないという危機意識の高まりのなかで、北朝鮮はアメリカを会談場に引き出し、激論の末、かれらの強硬意見をあますところなく粉砕し、1999年9月17日のベルリン朝米高位級会談では、北朝鮮の経済制裁を一部解除させるという勝利をかちとった。

アメリカの国内をはじめ世界は、それを超強大国のいま一度の屈服外交として騒ぎ立てた。共和党議員は、「ホワイトハウスが北朝鮮の圧力に屈服」したとしてクリントンを非難し、下院外交委員長は、「数十年間続けられた制裁の緩和計画に反対する声明」なるものを発表した。かれは声明で、「クリントン政府の対北朝鮮接近方式は、国会の支持を受けていないし、次期大統領のもとでは維持されないであろう」と主張した。

最近、ある軍事評論家はその著『北朝鮮とアメリカの関係と

韓半島の情勢』でつぎのように指摘している。

「元来アメリカは、相手が弱いと判断すると、どのような口実をつけても必ず侵略する国である。

イラクやユーゴの例がそれである。

しかし、アメリカは北朝鮮に恐れをいだいている。北朝鮮はアメリカとは死を覚悟して戦い、必ず勝つという自爆精神と必勝の精神で武装した百万の軍隊を保有している。

とりわけアメリカは、北朝鮮のミサイル能力が一通りでないことをよく知っている。もし北朝鮮が射程 500 キロのミサイルしか持っていないとしたら、アメリカは北朝鮮を協商の相手としないであろう。

北朝鮮がアメリカ本土をも打撃しうるミサイル能力を持ち、またアメリカと戦う決意の固い国であるから、アメリカは北朝鮮を強大国とみなして協商しているのだ」

筆者が指摘しているように、北朝鮮の対米強硬外交の背景には政治的・軍事的力があるのである。

先軍政治が帝国主義との政治外交的対決で堅持している立場は、いささかの譲歩もなしに自国の根本的利益を固守するという強硬高圧姿勢である。

強硬自主外交は誰にでも実行できるものではない。激しい外交戦における決定的な切り札は、自国の強力な政治的・軍事的潜在力にある。

北朝鮮が、世界が手に汗を握って見守るなか、国運をかけた諸分野の対米交渉で勝利をかちえているのは、それが強力な軍事力＝先軍政治に支えられているからである。

90 年代における北朝鮮の外交は、このように妥協を知らない原則外交として特徴づけられる。

歴史をかえりみれば、タレーラン式雄弁と説得外交、ビスマルク式鉄の外交、チャーチル式打算外交、松岡式奸計外交、モロトフ式沈黙高圧外交などさまざまな外交形態が存在していた。

ところが、北朝鮮は政治情勢の推移を巧みに利用して、アメリカや日本を対話に呼び出しては相手の主張を逆手に取ってやりこめ、原則をいささかも曲げることなくつねに自己の主張を通してきた。

それでは、アメリカや日本がどうして北朝鮮の原則外交の前に膝を屈して、譲歩をくりかえすのであろうか。

アメリカの外交関係協議会(非政府研究団体)は、1998 年 6 月の政策報告書で、「金正日体制は滅亡しない。北朝鮮を武力で屈服させることはできない」という内容を骨子とする対北朝鮮外交指針を発表しているが、アメリカや日本の外交の背景にも強大な軍事力と経済力がある。外交はそうした力によって目的を達成する一つの手段にすぎないのである。

北朝鮮の場合も同様なことが言える。

北朝鮮がそれほど豪胆な気骨をもって、外交原則を守り通せるのは、先軍政治の力があるからである。

1999 年 5 月、クリントンは特別補佐官ペリーを平壌に送って、朝米対決の平和的解決策を模索した。

ペリーは帰国後、平壌を武力で屈服させることは不可能である、平壌はバグダッドやベオグラードとはまったく異なる、北朝鮮を見くびれば手痛い打撃を蒙るであろうから、平和的方法

で朝米関係を解決すべきだとする『ペリー報告書』を公表した。

他方、あれほどミサイル騒動に熱を上げていた日本は、村山富市元総理を団長とする『超党派』.代表団を平壌に送り、朝日国交正常化会談の再開を申し入れた。

しかし、だからといって、アメリカと日本が、北朝鮮の孤立・圧殺政策を放棄したのではない。

共和党の『アーミテージ報告書』に見られるように、アメリカの保守勢力はいまなお、先制攻撃による北朝鮮の制圧を夢見ており、日本には、「平壌を一撃のもとに壊滅」させると放言する石原東京都知事のような極右保守勢力が横行している。

けれども北朝鮮は金正日将軍の先軍政治によって、今後もいっさいの危機を巧みに制御して自己の意図を貫いていくであろう。

軍事的対決における勝利

1990 年代初めの冷戦終結によって平和が到来したかのごとく言われているが、国際場裏ではアメリカなどの帝国主義勢力が依然として「力の政策」を強行し、資源地帯や軍事戦略的重要地帯を軍事的に制圧、支配する意図をむきだしにしている。

アメリカは、20 世紀はアメリカの世紀であったが、21 世紀もまた、アメリカが唯一の超大国となるアメリカの世紀となるであろうとし、それに見合った軍事力を備えるべきだと公言している。

アメリカは、朝鮮半島をもっとも重要な戦略的要衝とみなし

て、南朝鮮と日本の各地に軍事基地を設け、数万にのぼる最新装備のアメリカ軍を配備し、これに膨大な軍事費を注ぎこんでいる。

アメリカが朝鮮半島の制圧にそれほど躍起になっているのは、冷戦の終結後も社会主義の旗を高くかかげて、アメリカの政治的･軍事的世界制覇戦略に真っ向から対決する北朝鮮を目の上のたんこぶとして憎悪しているからでもある。

では、この軍事的対決での勝者はどちら側であろうか。

冷戦終結後における対決の序幕は、1994 年 12 月 17 日、アメリカ軍ヘリの撃墜事件によって開けられたと言えよう。

この日、前線警戒勤務に当たっていた人民軍兵士が非武装地帯の休戦ラインを越えて北側領空を侵犯したアメリカ軍ヘリをただの一発で撃墜したのであった。

2 人の乗務員のうち 1 人が即死し、生き残った 1 人は、かれらの計画的なスパイ行為を認め、釈放を懇願した。ここにアメリカの犯罪行為は白日のもとにさらけだされた。

ところが恥知らずなアメリカは、南朝鮮駐留アメリカ軍司令官の名で人民軍側にメッセージを送り、越境が偶発的な出来事であったの、遺憾だのとして犯罪を否定し、死亡した操縦士の遺体と捕虜をクリスマス前に送還するよう威圧的に要求した。

これにたいする北朝鮮の態度は断固としていた。人民軍板門店代表部はアメリカ軍司令部側代表を呼び出してきびしく抗議し、共和国領空の侵犯および軍事施設にたいする偵察行為を認めて謝罪するよう求め、さもなければ、操縦士を絶対に送還しないであろうと宣言した。

この事件は、アメリカ大統領特使が平壌を訪れ、アメリカ軍機の北朝鮮側領空の侵犯を認めて謝罪し、事件の再発を防ぐことを担保するとともに、朝米軍部の接触を約束することによって決着した。

北朝鮮はアメリカ軍の侵犯行為を、大小にかかわりなく国家自主権の侵害行為とみなし、そうした視点からすべての侵犯問題に対処しているのである。

アメリカがヘリの不法侵入事件を偶発的な出来事とし、その重大性を認めようとせずに不当な圧力を加える一方、第 3 国を動かして捕虜を取り返そうとしたとき、金正日将軍はかれらの愚劣な行為を糾弾し、この事件は共和国とアメリカが直接解決すべき問題である、われわれは国の自主権を犯したアメリカの軍事行動を重大視しなければならない、と指摘した。

1996 年に入ると、アメリカはまたしても共和国北半部を刺激しはじめた。

アメリカは 1 月初め、原潜「バーミンガム」を朝鮮半島周辺に送り込んで「潜水艦連合大訓練」をおこない、2 月には、核空母「インディペンデンス」を朝鮮東海に出動させるとともに、原潜や核戦略爆撃機をはじめとする攻撃用作戦兵器を投入して、海軍合同軍事演習「ヴァリアント・アーサー 96—2K」を強行した。

これと時を同じくして、アメリカ国防長官は、年例の「防衛報告」で北朝鮮を視野に入れ、「アメリカの死活的利益を危くする」脅威を抑制するだけでなく、「戦って勝利する」であろうと好戦的な暴言を吐いた。

これは、前年の大水による北朝鮮の経済難を奇貨として、北

朝鮮の軍事的支配をもくろんだ計画的な行為であった。

北朝鮮にたいするアメリカと南朝鮮の攻撃がいよいよ実戦段階に移ろうとしたとき、北朝鮮は人民武力省第 1 次官の談話をもって、これに断固とした反撃を加えた。

「祖国の安全と革命の獲得物を守るわが人民軍の使命は、侵略にたいする防御にのみ限られているのではない」「火には火で、棍棒には棍棒で制圧するのがわが軍の気質である」「わが祖国の寸土、一木一草をも侵すなら、強力な自衛的措置をもって一大痛棒を加えるであろう」という強硬内容で貫かれた談話は、北朝鮮のゆるぎない決心と意志をこめた宣言であった。

談話が発表されると、アメリカの国内に混乱が生じた。

北朝鮮は、1996 年 4 月 4 日、板門店代表部スポークスマン談話をもって、朝鮮人民軍側は停戦協定によって課された、軍事境界線および非武装地帯の維持･管理と関連した自己の任務を放棄するとし、その付随措置として、板門店共同警備区域および非武装地帯に出入りする人員・車輌の識別標識をいっさい付けないことにすると宣言した。

アメリカにたいする連続強打であった。アメリカはこれに一言の反駁もできずに戦争挑発騒動を中止した。

1998 年 8 月、北朝鮮の人工衛星打ち上げで生じたアメリカ･日本側と北朝鮮との軍事的対決でも同じことが言える。

共和国が人工衛星を打ち上げ、正確に軌道に乗せたという、9 月 5 日の平壌側公式報道にもかかわらず、アメリカと日本は、北朝鮮が弾道ミサイル発射実験をおこなったとして、「制裁」「対応」をうんぬんし、軍事的対決へと動き出した。

アメリカは、軍部首脳の秘密会議を開いて「アメリカ軍の朝鮮における戦争準備状態の維持」を決定し、19 億ドルの軍事予算の追加を決定した。

南朝鮮に飛んだクリントンは、1998 年 11 月 22 日、烏山（オサン）アメリカ空軍基地で「アメリカはアメリカ国民と友邦を守るためにどんなことでもする覚悟ができており、その能力もある」「われわれの力は外交的努力とともに、強力な軍事力によってのみ裏付けられるであろう」とうそぶいた。

アメリカの保守勢力は、協商が失敗した場合、南朝鮮駐留アメリカ軍の増強と戦域ミサイル防衛体制の構築によって、北朝鮮にたいする「抑止力」を強化し、最悪の場合、「北朝鮮の核施設への先制攻撃」も考慮すべきだと主張した。

日本も、北朝鮮の人工衛星打ち上げを弾道ミサイルの発射だと主張し、日本がその射程内にある以上、対応策を講じるべきだと騒ぎ立てた。

ここで、日本をはじめ帝国主義連合勢力と北朝鮮の軍事的圧殺を謀議したアメリカは、すでに 80 年代に作成し、90 年代初めから推進しはじめた朝鮮半島「有事」における「作戦計画－5027」を大幅に修正して、「作戦計画 5027－98」を策定した。これは、アメリカと南朝鮮の連合軍が北朝鮮を先制攻撃し「国家機能を崩壊させることを目的」とする北侵戦争計画で、ここでは、五つの段階を経て北朝鮮を軍事的に制圧することが予定された。

第 1 段階は、朝鮮半島とその周辺にアメリカ軍を集結し、空と海、国境を封鎖する制裁行動によって北朝鮮の動きを抑えることにあり、第 2 段階は「無力化打撃」段階で、膨大な野戦砲兵

力と飛行隊、巡航ミサイルで北朝鮮全域に長期の砲爆撃を加えて北朝鮮を「無力化」することにある。第 3 段階は「地上攻撃作戦」段階で、北朝鮮の東西両海岸での大上陸作戦と空挺作戦、特攻隊作戦を組み合わせた全面的地上攻撃作戦によって、平壌の作戦的包囲を実現し、清川（チョンチョン）江界線まで「占領」する段階である。第 4 段階は「作戦成果の拡大」段階で、清川江以北の全域を「占領」し、第 5 段階は、「終戦」段階で、「自由民主主義体制下の統一」を実現するというものであった。

この計画にはまた、三つの戦争開始方法が設定されており、第 1 は、核問題と人権問題を口実にして制裁を加え、その延長線上で武力攻撃に移る方法であり、第 2 は、北朝鮮の「核疑惑施設」に「外科手術式」打撃を加える方法であり、第 3 は、長期間情勢を緊張させ、情勢の険悪化を口実にして先制打撃を加える方法である。

アメリカは、作戦計画の実現をはかって、54 万 5,000 余のアメリカ軍と 63 万の南朝鮮軍、5～7 の空母戦団、ステルス戦闘爆撃機「F117」「F111」、核搭載戦略爆撃機「B1」「B1B」「B52」などハイテク兵器と大型打撃手段を投入する万端の準備をととのえた。

これにたいし、北朝鮮は、1998 年 12 月初め、朝鮮人民軍総参謀部スポークスマン声明を通して、「作戦計画 5027－98」の真相をあばき、次のように宣言した。

「われわれには、われわれの方式の作戦計画がある。『外科手術式』だの『先制打撃』だのというのは、決してアメリカだけの選択権でなく、その打撃方式もアメリカの独占物ではない。

わが人民軍の打撃には限界がなく、その打撃を避けうるところがこの遊星上にないということをはっきり知るべきである」

アメリカはぐうの音も出せずに、肩をすくめ、「作戦計画 5027」は泡沫のごとく飛散した。結局、北朝鮮の占領支配を狙ったこの計画は、アメリカが北朝鮮の軍事的威力を認定し、強大国の地位に座らせるという皮肉な結果をもたらしたのであった。

CNN テレビの特派員マイクル･チノイは、記者会見で、「北朝鮮は人工地球衛星の発射によって、朝鮮民族はやはりあなどりがたい民族であり、やたらに手出ししえない存在だということをいま一度誇示した。アメリカと日本が北朝鮮の衛星打ち上げを『弾道ミサイルの発射』だと騒いでいるが、実を言えばこれは恐怖心の表れである。北朝鮮は今度の発射を通じて、地球上のどこであろうと強力なミサイル攻撃を加える能力があることを示した」と指摘した。

いま、アメリカは北朝鮮の軍事力を認めている。1999 年のユーゴ空爆後、国防省では、朝鮮半島で戦争が起きた場合、どれほどの戦費を要し、どちらが勝つかをシミュレーションしたことがあった。

コンピューターは、朝鮮半島戦争でアメリカが支払う戦費は 1 日平均 57 億～71 億ドルであり、勝者は北朝鮮である、という答えを出した。これは、1 日平均 5,000 余万ドルを費やしたユーゴ空爆に比べて、100～140 倍の膨大な費用、言い換えれば 2,600 億ドルの国防予算中アジア太平洋地域に支出される軍事費 870 億ドルを戦争開始２週間で使い果たしながらもアメリカが敗北するということである。なんとも恐ろしい結論であった。

現実的にも仮想的にも、また将来においても、アメリカは北朝鮮との軍事的対決で勝利できないというのが、今日、世界の認識である。

これは、金正日将軍の先軍政治によって朝鮮人民軍は無敵の強兵に成長し、軍と人民は将軍を中心に一心団結した強大な力を備えているからである。

先んずれば人を制すると言われているが、金正日将軍が先軍政治をもって軍を強化し、北朝鮮の国力を充実させなかったとしたら、北朝鮮人民はあの苦難にみちた時期に、アメリカを先頭とする帝国主義連合勢力の軍事的圧殺策動に屈して、植民地奴隷の境遇に落とされていたであろう。国の自主権と民族の尊厳を守った金正日将軍の先軍政治こそ、北朝鮮を軍事強国に堂々と押し上げた偉大な政治である。